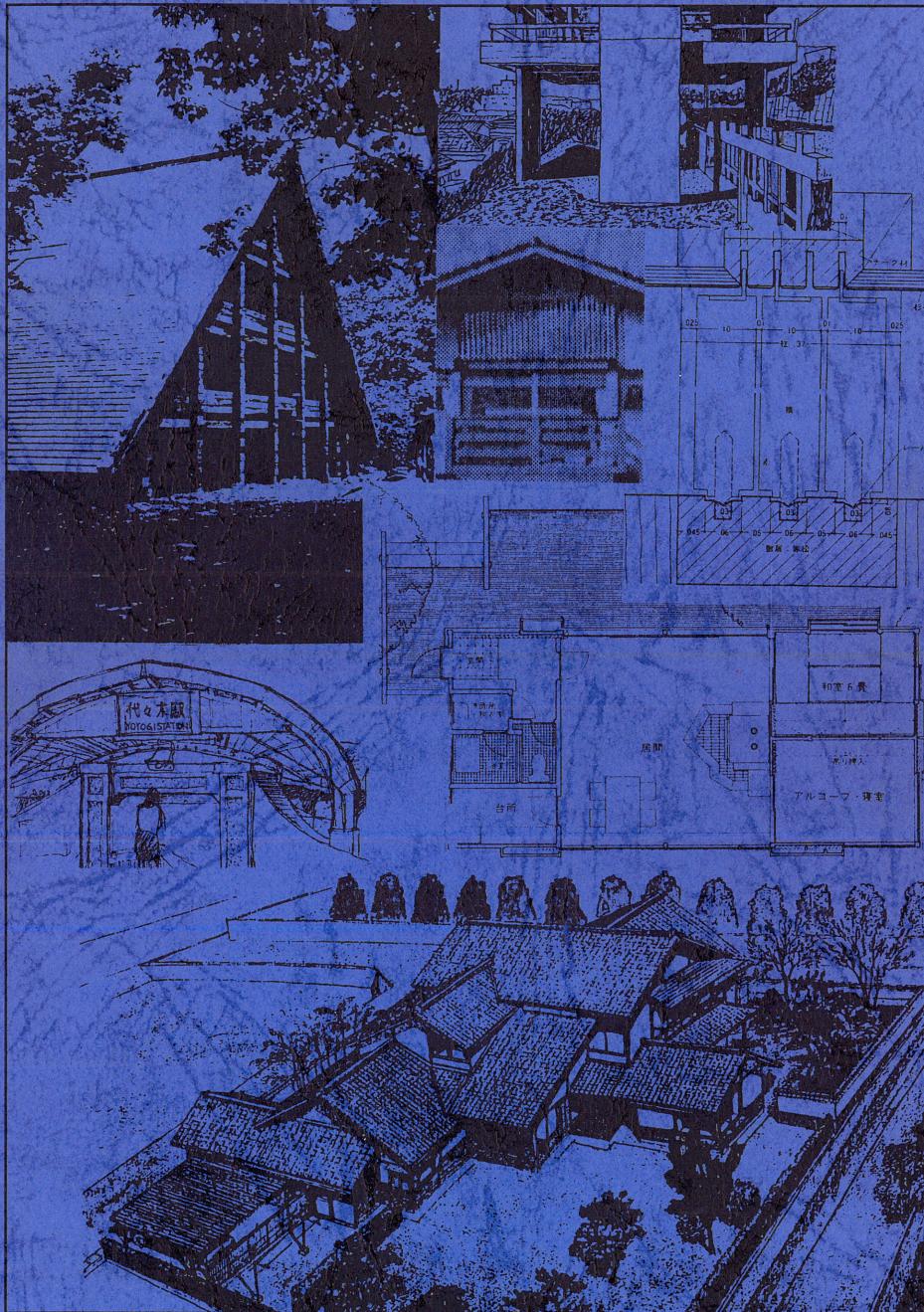


生活文化

VOL. 4



生活文化同人機関誌

建築模型 制作・修理



集合住宅から古建築まで手仕事ならではの暖かく、雰囲気のある、しかも精緻な模型作りを目指しています。

てらもと工房

寺本 雅男

〒657-0066

神戸市灘区篠原中町5丁目11番3号

TEL&FAX 078-801-5186

もくねっとハウス

埼玉県朝霞市膝折町3-4-40

TEL 048-461-0144

FAX 048-461-7281

初雁木材有限会社

木の住まいづくりのお手伝い…

- 杉材を中心に内地材の販売
- 木造住宅の請負（施工）
- 作業場（刻み場）の提供
- 木の事は何でもご相談ください。

建築施工

新

有限会社 益子工務店

〒324-0055

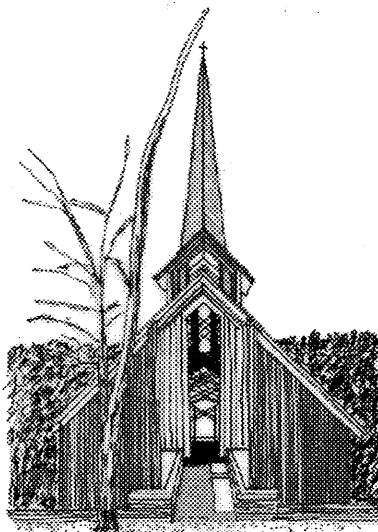
栃木県大田原市新富町2-3-34

TEL 0287-22-2288

FAX 0287-22-7977

生活文化 第4号

1999.8



Therapeutic Worship Center 1988

/ Fay Jones

世紀末の今	吉田 桂二	2		
今、環境は	宇井 純	1 1		
昨日・今日・明日	吉田 桂二	2 5		
21世紀に伝えたい建築（私の好きな建築）		3 7		
同潤会江戸川アパート	伊郷 吉信	38	私の選ぶ建築家	江原 幸壱	39
20世紀の建築	大久保 歩	41	好きな建築などありやせんがな！	加藤 雅久	42
八ヶ岳高原音楽堂1988	岸 未希亞	43	煉瓦の境界	北原 泰邦	44
私の好きな建築	兒島 峰	45	ベルリンの壁	佐々 伸子	48
私の思う20世紀の建築	佐藤 基	49	20世紀・私の好きな建築	鈴木 喜一	50
20世紀・私の好きな建築	鈴木 久子	52	私の好きな建築	高橋 大助	54
bolt。私の好きな建築？	高橋 大助	56	『建築物』に対してのボクら	土岐 安麗	58
木造雑感	桧山 文江	60	私の好きな建築	松井 郁夫	64
20世紀・私の好きな建築	松本 昌義	65	私の好きな建築	水谷 由香	69
スカイハウス	宮越 喜彦	71	鰐木一伝承と記憶一	山本堅太郎	72
私の好きな建物	山本 厚生	74	1954 故・丹下自邸	吉田 桂二	75
20世紀・私の好きな建築	吉塚 幸雄	76			
同人レポート		7 8		
建築に使われる樹	飛山 龍一	79	生闇學舎	高橋 俊和	84
私の大工見習い生活	森山 ゆき	90	民家・町並の保存と再生	日影 良孝	94
神戸復興住宅再考	岩崎 直子	100	茨城県のすまい	外岡 生帆	106
素敵人々	岡部 知子	110			
大平建築宿分科会からのレポート (1998年)		1 1 4		
地域文化の自然感	江原 幸壱	1 1 5		
大平の川遊び	寺本 雅男	1 2 4		
		1 2 6		
		1 2 8		

『世紀末の今』

吉田桂二

●時間に「ふしめ」はないが

世紀末であるというが、時間にモノサシがあるわけではなく、人間が勝手に付けているに過ぎない。だから百年の「ふしめ」と言ったところで、深い意味があるとは思えないが、人間は、自分の意思ではどうにもならない時間にモノサシを付けることで、時間を自己化しようとしたのではないか。結果としては、それが自己暗示となって、世紀末だから総括すべき時というようなことになってしまうのだろう。

屁理屈は止めることにして、おとなしく、多少論説めいた総括をしてみよう。しかし、世紀末に至る過程を記録的に述べるつもりは毛頭ない。それは歴史家の仕事であるであろう。やはり、「世紀末の今」私が考えていること、という内容になる以外にない。

●「物あまり不況」は21世紀への不気味なツケ

「長引く不況」という言葉が飛び交うようになってから、既に数年経つ。高度経済成長の始めからバブル崩壊に至る間にも、短期間の不況は幾度もあった。今の不況も当初は、誰もが「年末になれば」とか「来年になれば」と、短期間の不況を希望的に予想していて、政府もそうだったに違いない。しかし、今度の不況は、これまでのような短期間の不況とは性格を異にしていて、社会の基本的な体質に疑問を突き付ける、不気味さを持っているように思われてならない。

結論的に先ず言ってしまえば、戦後この方、突き進んできた工業化路線が、ついに破綻を迎えての不況と考えられる。工業化は良質な製品を量産することによって、より安価に供給できる点は大いに評価できるであろう。戦後間もなくの頃から始まった電化製品の大規模供給が、それまでの日本人の生活レベルを飛躍的に向上させてきたことを思えばよい。

それ以前に電気冷蔵庫や電気洗濯機、電気掃除機を使っていた家庭は、ほとんどゼロであったし、電気炊飯器は戦後の発明である。それらは決して安価ではなかったけれども、1950年から翌年にかけての朝鮮事変での「特需ブーム」、1960頃からの「所得倍増」以後の高度経済成長で、多少無理して買ってもなんとかなる状態が推移したからに他ならない。

しかし量産した物は売らなければならない。量産した製品が飽和状態になって売れなくなれば、少しばかり価値を付加した新製品に仕立て直して、買い替えさせる戦略になる。以前の製品の不具合は、部品がないとか、修理は高くつくということで捨てさせられ、新製品への買い替えを強制させられる。量産は物を飽くことなく「商品化」し、使い捨てを是認する浪費社会を現出させないでは済まない。高度経済成長期の頃には「消費は美德」とさえ言われた。

量産される製品の中で、自動車が最も端的にそうした状態を示している。あまり傷まないうちに下取りさせ、新車に買い替える中古市場のシステムは、巧妙に仕組まれた量産商品販売の戦略である。

工業化路線は住宅にも及ばずにはいなかった。「住宅の産業化」と呼ばれた現象がそれである。その1は建材部品の工業生産化であり、その2は住宅そのものの工業生産化であった。その1は新建材と呼ばれ、その2はプレハブと呼ばれたが、今はそうした呼称は消えている。なぜか、その1とその2が既に合体して、殆ど全ての住宅がその路線の中に捕らえられてしまっているからだ。その結果は住宅の短命化という恐るべき現象である。工業化が始まる以前の住宅は、人間の命より何倍も長命であるというのが、誰もの常識であった。

現在の不況の引きがねになったのは「バブルの崩壊」と言われた、地価は無限に上昇するという、土地神話の虚構性が露呈したことによる。通貨の流れが滞るので、物を買わなくなるが、それでも困ることはまるでない。既に物はあり余るほどあるからだ。「物あまり不況」なのである。浪費はストップしたが、戦後この方の半世紀に及ぶ社会の変化は、環境に手痛いツケを残した。21世紀はこのツケの始末から始まろうとしている。

●戦後は誰もがゼロからの出発だと思っていた

話題を、日本の大都市はもとより、中都市までの殆どが焦土となって迎えた1945年の敗戦の時へ戻したい。日本の工業化路線はこの時始まったと思ってよいからである。既に戦争中から、敗戦に次ぐ敗戦で日本軍が後退する度に、アメリカ軍の物量作戦という言葉が飛び交っていたが、それを実感したのは降伏後、占領軍が日本にやってきて、ジープに乗った彼等を見た時であったと回顧する。

日本の自動車は、前に廻ってクランク軸をエンジンに差し込み、手で回して起動させていたが、これが容易には起動せず、走り出すまでに大変な時間を要していた。ジープは乗り込むや否や、瞬時に高速で走り去る。これを見た時、日本が負けたことをいや応なく実感させられたのであった。

国力が工業力を生み育て、工業力が国力を培って、近代的国家として霸をなしてゆくのに、日本は競うべき実力もなく必然的に敗れたのだ。敗戦までの日本は全てが今否定されなければならない、と誰もが思っていた。ゼロからの出発であることを、焦土と化してしまった風景が、そのことを最も端的に示していた。

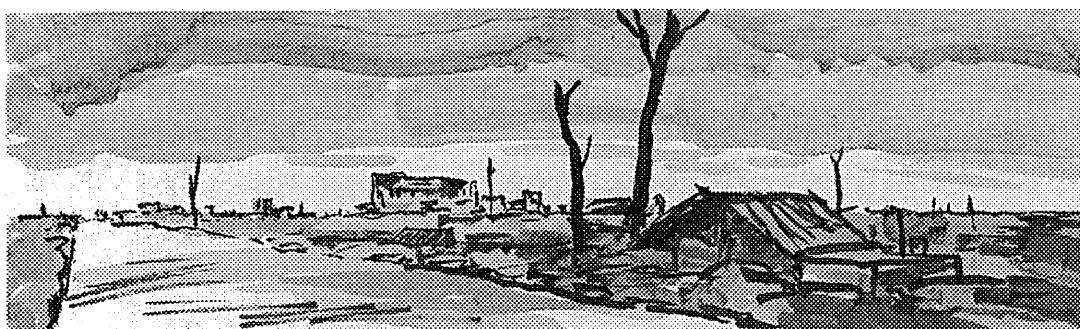
●建築家が手掛ける住宅は理想像を求めて造られた

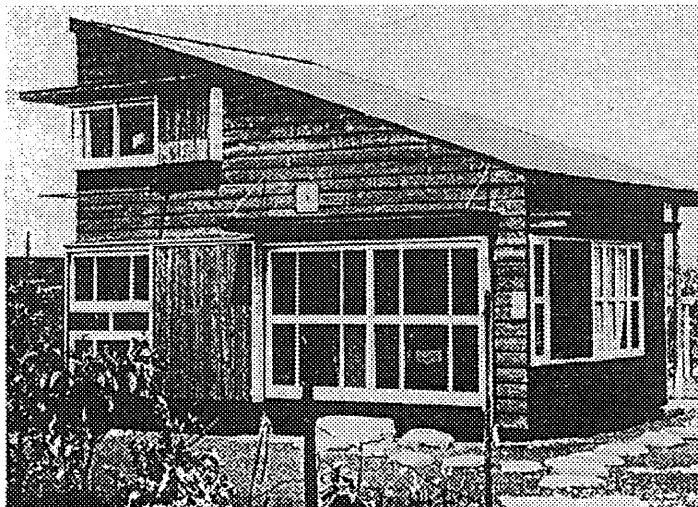
戦争直後は、戦時中は住宅を造ることができなかつたのと、空襲で大量の住宅が焼失したことと、未曾有の住宅難の時代で始まった。住宅を建てる資金は乏しく、資材も容易には入手できない。建てられたとしても延べ15坪以内という制限があったが、15坪以上を望む心境は露ほどもなく、15坪は住宅規模が到達すべき目標数値と考えられていた。

住宅以外の建築は全く造られていない。住宅は建てられても、大半がバラックの範囲を出ることはなかった。しかしそんな状態の中でも、建築家が手掛ける住宅が少しづつ造られ始めた。東京の山手線内でも、敷地100坪に15坪の木造平屋建という規模であった。

戦後住宅史を記そうとした場合、おそらく誰が記したとしても最初に登場する住宅は、池辺陽の「立体最小限住居」であるであろう。もちろん彼以外の建築家を名指しすることはできるが、この作品が当時の建築家達が造ろうとしていた住宅の本質的な内容を、最も明瞭な形で提示しているからに他ならない。

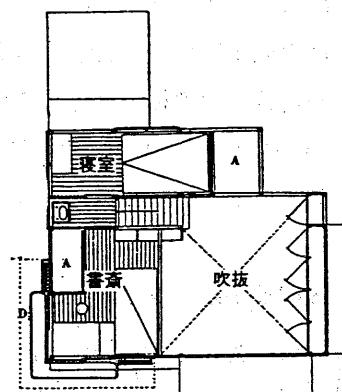
住宅はそこでの生活を写しとて造られるとしても、複数の家族が小さな家に雑魚寝している現実の生活は写しとるべくもなかつたし、過去の封建的な家族生活は否定され、設計の根拠となる生活はどこにもなかつた。しかも、日本が新しく再建されなければならな



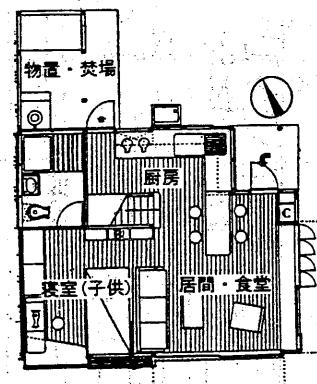


住宅 No. 3 1950

(立体最小限住居)



2階平面



1階平面

いとすれば、これから的生活はこうあるべきだ、という主張性が設計の命題となる。後になって「小住宅時代」と呼ばれたこの頃の住宅作品は、このことを知らなければ理解することはできない。この頃、西山卯三は「これからのすまい」という著作を記しているが、この書名には、当時の建築家の想いが込められている。

建築家達が提唱した「これからのすまい」における生活内容をまとめてみると、次の6点になる。食寝分離・就寝分離・格式空間の排除・家事労動の削減・建築の工業生産化・生活の椅子坐化である。食寝分離は家族空間と個人空間を分けること。就寝分離は親子が別の部屋で寝ること。今ではこれが普通ということになっているが、敗戦時以前の日本人の生活は、茶の間が夜は寝室になったり、男の子は父親と、女の子は母親か祖母と寝ることも多かった。格式空間の排除とは、座敷や応接間などを来客のための空間と見なし、それらが家族が日常的に居る空間よりも優遇されていた、以前の家のつくりようの否定である。当時の小住宅の規模では、そんな余裕のある家は望むべくもなかつたが、それを逆にプラスに置き換えた主張と見ることもできる。玄関さえも、こうした格式空間と見た建築家もいた。前述の「立体最小限住居」には玄関土間がない。池辺陽は玄関不要論者であった。彼は「日本の道路は雨が降ればぬかるみになるが、舗装されるようになれば泥靴にならないから、玄関土間は要らなくなるはず」と主張していた。

家事労働の削減は、女性解放という当時の人権擁護思想が基礎となっている。女性が主として負担していた家事作業を、家庭内における奴隸労働と見なしたわけだが、その削減

には、設備の充実化、生活の電化などを基礎とした、台所土間の床上化もあった。この数年後から始まったダイニングキッチンへの改変ブームは、この主張の延長上にある。池辺陽はNo. 8と名付けた住宅で、始めてアイランドキッチンを設計している。しかしこの家には冷蔵庫はないし、流しも調理台もハンダ付けの亜鉛鍍鉄板であった。ガスもないのに、調理台続きの鉄板に丸く穴を開けて、炭を燃料とする七輪が嵌め込まれていた。フードは板4枚でつくった煙突が屋根に抜けていたが、換気扇というものはなかった。池辺陽は「工業製品のプレスされたステンレスシンクが使えるようになる。電化製品が普及して電気

ヒーターで調理する時代がくる」と、来たるべき工業化時代を予言待望していた。建築の工業生産化は、こうしたことを含むだけでなく、建築材料や工法の工業生産化を待望する主張であった。

生活の椅子坐化は、畳敷きの部屋は転用されやすいので、食寝分離・就寝分離の原則が守り難くなる、という内容を含んでいる。また、畳の上に寝るのは埃を吸うから非衛生とも言われた。部屋の用途の固定化であり、生活姿勢の洋風化であるが、機能主義建築への傾斜でもある。

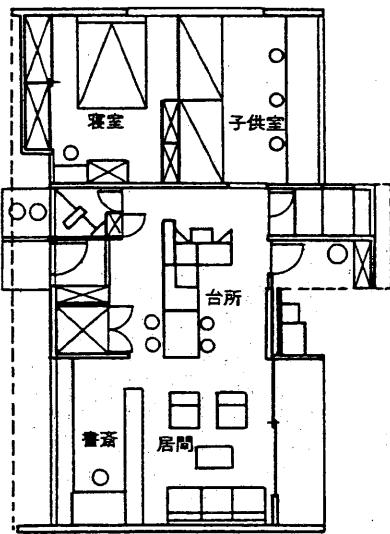
これらの6つの「これからのはま」を求めての主張が、今どんな姿になっているのか。果たしてそれらが、どんな実を結んでいるのか。それを見極めることこそが、20世紀の総括であると考える。

●民主主義＝国際化＝近代化＝機能主義の建築という図式

敗戦は、明治から徐々に高まり戦争に明け幕れた日本の国家主義が破れ去り、民主主義に転換を迫られた契機であった。この180度の転換は、国家主義という自國のみを突出させる立国から、万国の平和的な和合を目指す中での立国への転換を意味した。ナショナリズムからインターナショナリズムへの転換と言うこともできた。労働運動は「万国の労働者、団結せよ」と歌い、デモに際しては「ああ、インタナショナル、我等がもの」を好んで歌つたのである。

昭和の初期、東京上野に建てる「帝室博物館」(現在の国立博物館)の設計コンペがあり、当選して建てられたのは現存する本館であるが、前川国男は落選するのを承知で、白い箱を組み合わせたような、機能主義的デザインの案を提出した。その頃の公共建築は屋根と

住宅 No. 8 1951



か塔屋などにだけ、瓦屋根の伝統的様式の部分を取り付けた「帝冠式」と呼ばれる建築様式が好んで建てられたが、戦後になると、これを国家主義的デザインと見て否定し、民主主義を具現したデザインはインターナショナルな要素を持った機能主義であるべきだとされた。前川国男の落選案は、戦後になってから高く評価されたのである。

建築評論家の浜口隆一は「ヒューマニズムの建築」と題した本を書き、民主主義の時代は人民の時代、装飾的要素を去った実用的な機能主義の建築、これこそがヒューマニズムの建築であると論じた。この本は「これからすまい」と並んで、建築学生の必読書となった。

丹下健三は戦時中の国家的建築物のコンペに、寝殿造り風に屋根を連ねた案で当選を重ねていたが、これらは実現することなく終わっていた。彼は戦後になって「人民の建築」と題した本を書いているが、これは前記の著作に比して、多く読まれることはなかった。前川国男の時代に逆らって戦った一貫性を評価する眼からは、丹下健三は時代につれて豹変するオポチュニストと見られたのである。

いうまでもなく機能主義は、鉄+ガラス+コンクリートの建築であり、近代工業を基礎として、第一次大戦後の復興期のヨーロッパで成立している。日本ではそれが、第二次大戦後の復興期に到来したと見てよいであろう。戦争による荒廃を救うのは工業化の推進という道筋が見えてくる。「小住宅時代」の作品の中にも、それが濃厚に見られることは既に述べている。

●人口の都市への集中と住宅の産業化

戦後の復興政策から始まる工業化立国の道筋は、それまで第1次産業が主体であった国の体質を、根本から覆るものであった。人口は急速に都市へと集中し始め、大都市の周辺には住宅地が無限に拡大し、農村・山村・漁村は過疎化してゆく。若年層は都市に集まり、田舎は親の住む故郷になる。「別れの一本杉」「東京だよ、おっかさん」という歌の内容がそのことを物語っている。

都市に出てきて結婚し築かれた家庭は夫婦を単位とした「核家族」を構成する。大都市周辺に新しく開発された住宅地は、若年層の核家族ばかりの町になる。この大量需要が住宅の工業化を急速に促進させる原点となった。

工業化は建築材料の機械生産化から始まった。合板、ボード類、アルミサッシが量産され、工法は乾式化が進み、湿式工法は激減する。木材は戦時中の乱伐で完全に不足、戦後になって植えた苗はまだ成育中だから、ほとんど100%輸入材であった。しかし木材を売る側にとっては、原木で輸出するよりも、製材したものを輸出した方が高く売れるので2×4工法の採用を望み、日本の住宅にこの工法が開始される。ここまでくればプレハブ住

宅が造られ始めるのは必然となる。全国的にネットしたハウスメーカーが幾つも誕生する。建材や工法の工業化で熟練度が意味を失い、大工達は仕事を奪われてハウスメーカーの下に取り込まれてゆく。

戦前までの住宅はその内容を表示する場合、「8・6・4半浴付き美邸」というような表現をした。8畳・6畳・4畳半の3室と風呂のある家、という意味である。戦後になるとこれがガラリと変わる。「3LDK」というような表現になる。使用目的を限定しない部屋を連ねていた間取りが、食寝分離、就寝分離で、機能を分離して間取りするようになったことを意味している。このため、内部空間が細分化し、廊下によって各室が独立する間取りへと変化した。

●借家から持ち家への変化

戦前までは借家が8割、持ち家は2割であったという。戦後制定された「借地借家法」は、借地人、借家人の保護を目的として、地主、家主の権利を大幅に制限した。このため土地や家を貸すのは割が合わないので、貸地、貸家が激減した。今では持ち家8割、借家2割に逆転しているという。今思えば、この持ち家へ誘導する制度は、暴利を貪る地主、家主から借地人、借家人を守ると見せ掛けて、その実、大して金を持たない人間に金利のついた金を貸し、土地と住宅を所有させて、その人のその後の人生を金の返済に当てさせるという、銀行のあざとい企みだったのではないかと思う。不動産屋がこれに加担し、住宅産業が繁栄する図式が見えるではないか。

もしこれが逆転しなかったとすれば、どうなっていたであろうか。少なくとも、今よりもましな町ができ、暮らしにも落ち着きのある豊かさが得られているのではないか。

●工業化＝量産＝商品化＝物による人の支配

職人技で物を造れば、良い物はできるが、どうしても高価な物になる。工業化は良い物を廉価にすることができるわけで、それには量産する必要がある。しかし量産すれば売れて行く量には限界があるので、限界に達しそうになると、多少手を加えた新製品を造り、購入者の欲望を煽って、早く買わなければ損をするような心理に導く。旧製品の使用者は、部品がない、修理するよりも買い替えた方が結局は長く使えるから得になると言われて、新製品に買い替えることになる。こんな状態の中で造られる物の短命化が密かに計られ、良い物のはずが良くない物へと変わってゆく。使用者のニーズに応えた製品とPRするが、実は巧みな情報誘導で、本心は自分が売りたい良くない物を高く売り付けているのではないか。

いか。

使用者の方にも問題はある。もっと良い物があるのではないかの繰り返しで、生活の豊かさを物の豊かさに求めているのではないか。物欲のかたまりとなった使用者心理は、生活を無限地獄へと導くが、これがメーカーの思う壺なのである。

住宅の短命化もこの範疇に属する。住宅が車同様に、たった20年内外で取り壊されている現状は、歴史的に見ても異常な時代という他はない。もし持ち家政策が取られず、住宅の大衆的需要に対して、公的私的に造られた大量の借家が用意されたとすれば、物欲生活もなく、住宅の短命化はなかったのではないか。もし逆転しなかったら、ましんな町ができ、暮らしの豊かさがと考えた理由がここにある。

●環境の破壊は機械文明の末路を示唆している

もうここで、資源の浪費とそのツケとしての環境の破壊は、工業化のなせる悪業と言つてよいであろう。浪費は資源を枯渇させるほどに環境を破壊し、工業そのものが環境を破壊するばかりか、物が通過してゆく早さが廃棄物の山となって環境を破壊する。こうした悪へと傾斜してゆく社会態勢をどこかで断ち切らねばならない。これが21世紀の幕を開ける時の全人類的命題である。

工業化を歴史的に遡ると、ヨーロッパにおける産業革命に至るであろう。その時、機械文明が誕生した。ここで文化と文明についての定義をしておきたい。文化は民族内で共有する価値と言ってよからう。したがって他の民族へと伝播することはない。もし伝播する文化があるとすれば、それを文明と呼ぶのである。機械は明らかに文明であった。車は世界のどこで使おうと、早く移動できる便利な機械である。しかし文明は侵略性が付き纏うものだと思わなければならぬが、伝播しえない文化を無理に伝播させようとした場合は、侵略以外の何者でもなくなる。建築はどうか。特定された位置から動くことのできないのが建築だから、これは文化しかありえない。建築を造る技術の中には、文明的な要素もないわけではないが、建築として形をなしたものは文化なのである。そこで機能主義建築のことに話題を移すと、あれは建築ではあるけれども、機械文明化した建築なのではなかろうか。機能主義の旗頭であったル・コルビュジェは「住宅は住むための機械である」と宣言している。機能主義建築が機械文明と寄り添いつつ、侵略的に世界に広まっていったことは、日本の場合も含めて誰の目にも明らかであろう。

機械文明は人間を幸せにしてきたことは疑いないけれども、今は既に不幸をもたらしつつある段階に達してしまったのではあるまいか。環境の破壊は、機械文明の末路を示唆している。

●環境保全の大合唱に疑問符を

21世紀の扉を開くキーワードが「環境」であることは今や疑いない。既にここ数年の間に、環境にやさしい、環境保全、自然への回帰などを謳い文句にした商品が洪水のように流れ出てきている。これは良いことに違いないけれども、全て良しではないだろう。中には環境を商品化しようとするイカサマ物も多く見られる。どんなことでも大合唱になった時には注意を要するのだと思う。かつては工業化立国が大合唱であったのだ。それを反省材料にしなければならぬ。

このあたりで輪説は終わらせます。この後は「昨日・今日・明日」という恒例のレポートなので、難しい話はもうありません。ここでコーヒーブレイクとして、軽い話題がよいので、生活文化のことについておきましょう。

建築士会とか、新建築家協会とかいう団体がありますが、そうした同業者団体というのには、私はどこにも入っていません。それらは会員の社会的地位の向上とか、親睦とかが会の目的になっているようですが、同業者が集まると、反社会的な行動をするのが常なので、どうにもうさん臭くて入る気にならないのです。しかしそんな団体からでも講演を頼まれればやります。

同業者というのは、互いに傷を舐めあってかばいあうものです。良いことも良くないことも、まあ、お互いに頑張っているんだからと、言うべきことも言わずに認めあってしまうものです。

全国町並み保存連盟も、かつては運動の中核をなしていて、活発な議論で沸騰していましたが、中心メンバーが居すわったまま老齢化し、今では年寄りが集まって、思い出にふける昔はよかったですに成り下がっています。

団体にはなっていなくても、建築家相互にも似たようなことがあると思います。今はとんと相互批判というのがないのです。何も論理的に冷静にでなくともよいと思います。「お前は何を考えてそんなことをしてるんだ」でも充分批判のうちに入ります。わが「生活文化」の会合ではどうでしょうか。単に集まって酒を飲むのが楽しいからというのでは、前記の団体と何ら変わることのない団体に成り果てるのだと思います。そんな傾向がないとは言い切れないのではないでしょうか。だから「語る会」をつくった意義は大きいと思います。「語る会」での話題を相互に豊富化しましょう。計画的でない会合だから、それがしやすいのです。「語る会」では聞くばかりでなく、必ず発言することが会の意義だと思います。

『今、環境は』

—大平建築宿基調講演より—

宇井 純

地球ができて以来、大陸があり海があったわけですけども、氷が水よりも軽いものですから海が冬になって氷りましても、上は氷が浮いてますが下は水がある。それから、湖水の様な場合にも上から氷るということで、海の下のほうはつねに液体である。それから、海が冬になって氷っても上は氷が浮いていますが、下には液体の水がある。それから、普通の湖水もかなり寒いところでなければ全部が氷るということは、真冬でも下の方に液体が残っている。魚をはじめとする生物がその中で生きていけるということです。これが、氷が普通の物質であったなら、つまり、水が普通の物質であったなら海も下から氷るということになる。結局、氷の中で生物が進化することはほとんどないであろう。したがって、我々の存在もなかったであろう。この水が膨張するおかげで岩に水がしみこむときに、そこで岩を割って、砂あるいは、粘土まで風化が進行します。そういう風化の進行した土が、海岸部に溜まる。こういう状況のもとではじめは、大気の中にはほとんど酸素はなくて、炭酸ガス、アンモニア、窒素、メタンという物質が大気の大部分を占めていたようですが、海の中で生命が発生し、それが、太陽の光を受けて光合成を行い、酸素を放出するようになりますといろいろ変化がありまして、だいたい35億年ぐらい前に最初の生命が海の中でできたらしい。それから、だんだんに、たとえば、炭酸ガスは吸収されなくなってくると、酸素がでてくる。酸素がでてくると、メタンは燃えてしまう、というような過程をへて空気中に酸素が増えてまいります。これが、上空に上がりまして、オゾンになり、オゾンが太陽からくる有害な紫外線をくいとめてくれるようになります。だいたい5億年といいますが、5億年前にはじめて海から陸に生物が上がってまいります。

一番最初に上がってきたのはおそらく苔の様な、生物というのは、植物であろうと思われます。海から陸にあがってきますと、太陽光線がよくあたるということでそれだけ光合成は楽になる。さらには苔の中にはじめは、土にはいつくばっていたであろうが、だんだんに立ってくるものができます。ただはりついでいるよりは立った方が光をよけいにうけることができるのでだんだんに草が生え、さらには、木になる。こういうふうにして

森林が形成されてきたであろう。この森林の形成というのは、地球上ではかなりの大きな変化になっただろうというのは想像ができます。森林ができるまでは雨は上から降り、流れる。岩石が風化をする。そうしますとその中にある肥料分、栄養分も水にとけて下に流れます。土は栄養分が豊富になって生物がさかえますけれども森林がないとこの水はすべて素通りして海にながれてしまいますが森林が形成されると、ここで窒素などの肥料成分がひきとめられる格好になって森林にだんだんたまってまいります。生物の住む場所としての豊かな森林が形成された。これは、5億年から後の話でありまして、地球の長い歴史の中で比較的最近の話です。

今、私共はこういうふうにして豊富な森林の生態系の中に大平宿にきておりますけれども、この森林が形成されたために、気候はずいぶん穏和になったはずです。それまでの砂漠にジリジリ照りつける太陽の代わりにここに森林があって、それをやわらかくうけとめ、しかも、上からながれてくる水をここの土がうけとめる。そして、水のもう一つの特徴ある物性である蒸発熱が大きいおかげでこの森林の気温をはじめとする気候条件は一定になってまいります。上からながれ下るはずの養分がここでくいとめられ、そこに厚い土が形成され、そして、生物が生きる場所が用意されてまいりますとこれを追ってまた海から上がってきたのがおそらく、蛙の祖先であり、あるいは、昆虫が上がってまいります。最初に上がってくるのは草食性の動物が上がってきました森林を食べます。上がってくるのがなんにせよ森林を食いつくしてしまうような種は結局、滅びます。餌がなくなり、まして、自分たちの生きている森林をつぶしてしまえば生きる基盤がなくなりますから草食性の動物でもやたらとたべてしまうものは滅びるであろう。ほどほどに食って、ほどほどに繁殖して死んでそれが土になるという比較的おとなしいものが生き残ったのであろうという想像ができます。そこに今度は、昆虫類が上がってきます。それから、両生類、爬虫類にかわり爬虫類から今度は、羽のはえた鳥という種族がでてまいりますと、鳥は空を飛ぶものですから、これまで地面の上を這いつくばっていたものが大きく生域範囲がひろがります。とくに、この海の浅いところで魚をとて食べていた鳥が陸に上がって森林で糞をする。その糞に沸いた蛆がまた虫になり、羽が生えて上方に飛んでいく。それを食った鳥がまた上に上がっていくというふうな形になってここで今度は、下から上にというような肥料分の流れが生じます。

これまで上から下への重力の作用だけで肥料分がながれていたのですが、鳥が生まれることによって下から上への流れが生じて循環が成立いたします。この循環が成立したということは、きわめておおきな変化の一つではないかと思います。鳥は主としてリン酸分、窒素もふくめますが、下から上へ物質を運んで糞をする、あるいは、上に上がって死ぬことによって土に返る。同時に糞の中に草や木の種を持っていきますから森林がどんどん上

にのびていく原因になります。この本の中でも引用したのですが、熊沢蕃山が書いたものの中に山に植林をする、山がハゲ山になっていてそれを植林する必要があるということをすすめた訳ですけれども、その中に人が行って苗を植えてもつかないような所が結構あるというようなところはどうするかというと、雑穀をばらまいておく、そうしますと、鳥がきてついばんで糞をする。糞の中には種がはいっているのでこれがそこで芽をだす。これも一時期に全部食ってしまうと後でこなくなってしまうので、鳥にみつかりにくいう柴・草を刈ってばらまくと鳥は何回もきて何回でも糞をする。そういうことをすれば30～50年後には山は結構緑になるものであると書いてある。進化の歴史の中で鳥がでてきたということは地球上の気候を大きく穏和にした一つのきっかけになったと思います。このアルプスでは鳥の行く高さに限界があります。そこから上は植物は生えません。これは、寒さのこともありますが、もう一つは鳥が上がりがない、あるいは生物がそこまで届かない、ということが養分の補給ができない一つの条件になっています。

もう一つこの日本列島に大きな役割を果たしたのは、日本人の出現。特に水田農業です。これがひろがりまして、そこへ海から鰐を肥料にしまして畠、田んぼにいれます。そうしますとこれは海から陸へ直接養分を持ってあがることになりますが、これにまた蛆が沸き羽が生えてそして人間もまた自分で出したものを担いで山にいき畠にまく、こういうことのくりかえしで上向きの循環はだんだん太くなってくる。特に江戸時代に肥料を山に担いでいった、その集積が今みている大平宿の森林、これも集積の一つであるというふうにかんがえてよろしいとおもいます。ですから我々の生活の見えないところで上から下への重力の流れに対して下から上へと肥料分が上がっていくという循環が存在する、ということを水の仕事をやっておりましてこの10年ぐらい意識するようになりました。日本の中で昔書いた人もおりますが、我々の日常の中で物質循環に大きな役割をはたしているということが、かなり意識的に議論されるようになったのはこの10年ぐらいでエントロピー学会が作られ、そこでエントロピー、物質の流れについての議論がかなり詳しく議論されるようになったのはここ10年ぐらいです。言われて見ればそのとうりと思われる方は多いのは決して不勉強だからということではなく、こういう議論が今までほとんどされなかったのであります。私の仕事もまた、この循環に絡んでいます。特に、人間が水を使い、それを環境に捨てる。ただ捨てるだけではなくて、どのように浄化して捨てるかという、せめて、周りに迷惑をおかけないようにして捨てるか、というのが最低一つの条件になりますが、もう一つはなるべくこの循環を豊かにするような方法で技術を使いたい。ただこの循環はかなり危なくなってきておりまして、まず我々が下肥を担いで山の畠に行くということがいまはなくなりました。化学肥料を外国から輸入して、いわば、石油を買ってきてそれで自動車、トランジスタなどこしらえて売りまして、その金で化学肥料を買い畠に

まくといふうなかたちになってきております。この循環のかわりに石油が我々の社会に転用されるということでどうにかつじつまはあいまして。

鳥が減ったうということは、多くの人が指摘することです。鳥を気を付けて見ている人は皆、鳥が減ったという。日本は世界のうちでもかなり鳥を大事にした国でありまして、あまり、鳥を撃つということなく、わりあいちいさな島国であるが、鳥は豊富おりました。しかし、今はかなり減ってとくに農薬などがやたらと循環の中に入り込み、生態系の上の鳥などに溜まってまいります。考えますと、鳥はあの体で空を飛ぶのですから、よけいな器官は諦めまして骨も中空にしてできるだけ軽い体で単位時間の消費エネルギーが大きくなてもともかく飛ぶようにできている。餌をたくさん食べ、エネルギーを消費します。餌の中にわずかにはいっているようなDDTとかPCBのような化合物はどんどんたまります。これもありまして鳥は大幅に減っていくということはやはり勘定にいれなければならない。ですから、この循環は細くなっているというのが現状です。

さて、こういう非常に不思議な水なんですけれども私たちは水を使いまして、湯水のごとく、とか大変贅沢な使い方をしてきたことは事実です。特に我々は、水道、下水道の技術者は、日本では、建築をやる方はなんといつてもこういう日本の在来建築というお手本が目の前にあります。好む、好まざるとに関わらず、これと格闘しなければなりません。全然知らないヨーロッパの建築の真似だけしているというのでは、やはり、日本では建築家として認められない。ですから、上水道、下水道ではそういう日本のかつてのお手本というのは、ほとんど目に見える所にはありませんでした。実はあったんですけども、探しませんでした。そこで、我々はいきなり外国の技術を闇雲に導入した。そして、そのときに流行っているものをつぎつぎ作るという失敗をしました。

土木工学の中で上下水道というきわめて地味な日の当たらない講座がありまして、私が応用化学から転向した時には30年振りに大学院の学生がきたといって大喜びしていたといくらい学生に人気のない地味な課目でした。

水道でいいますと実は大失敗をしております。ヨーロッパから全盛期の末くらいから最新の技術ということで砂で濾過する技術をいれてきました。緩速濾過という一日でだいたい数メートルどまりのゆっくりした濾過ですけれどもこれでだいたいよけいな病原菌は死んでしまいます。ですからほとんどその後消毒をいれなくても水道の水として飲むことができます。ところが、戦後になりましたこの緩速濾過というのがどうも場所を取るといいまして、アメリカで流行っていた急速濾過が一日に数百メートルの濾速で砂を通しておとしましてそれを砂で濾せばいいという急速濾過を各地に作りました。典型例は、新宿西口でありまして、あそこに

は大きな緩速濾過の浄水場（よどばし浄水場）があったのを、これを売って急速濾過を朝霞につくりますと、面積は数分の一になります。東京都は金も入り、西口副都心の開発ということが計画的にできた訳ですけれど実は、あれは巨大な遺産を売ったからです。最近になりますと、水の中に入っている有害な微生物はなんでも塩素で殺すことができるということで、どんどん塩素を入れてしまって、消毒をしていたところ、塩素入れすぎるとトリハロメタンという発ガン性物質が水道の中に増えてくる。特に、水質が悪くなるとそれが増えてくることで、この水道の水は直隠しにしていたのですが、たまたま化学関係の助手がこれを発表した時に蜂の巣を突ついたような状況になりました、なにも現場のことを知らない人がなぜ人の商売にけちをつけるのか、という騒ぎになったのは1973年でした。そういう騒ぎがあったが、アメリカではすでに公表されていました。日本の水道でも計測するといくらでも出てくるということでした。特に水道の技術者のなかでは、日本で3ヵ所、あそこの技術者が勤まれば一流だ、といわれるところがあります。水質が悪いので悪い水質を悪戦苦闘してどうやって飲める水にごまかして出すかという技術を鍛える場所で、東京では、金町浄水場、江戸川浄水場、大阪市の浄水場（淀川の京都の下水の入る源水をどうやってのませるか）、阪神間もそうです。もう一つは、北九州で、石炭を洗った排水でメチャクチャに汚れた水を水道水にして飲ませた浄水場。だいたい浄水場の技術者の修行の場所といわれたものです。そういう難しい技術で一生懸命塩素をいれて浄化していましたが、発ガン性物質を作っていたということになりました、我々は頭を抱えます。もう一つ、この10年ぐらい頭をかかえたのは濁りをとるためにいっていたアルミニウムがどうもアルツハイマーの原因として疑われているということで、これも文字どうり頭にきます。微量のアルミニウムというのはどういう訳か、体によくない、ところが、例えば東京の場合、水道では毎日何十トンという硫酸アルミニウムをいっています。こらは、濾過機で完全に取り除くことができて、蛇口には出てこないということになっていますけれど、しおちゅう蛇口にでてくるという、水道の水の水はそれだけではなくて他にもいろいろ最近不都合がみつかりまして、安心して飲めないということでペットボトルに入っている水を買い飲むという方が多いですが、ペットボトルは2リットルぐらいが200円程度の水です。水道水は1トンが200円しないぐらい、ペットボトルは2リットル200円、これをトンに直すと10万円／1トンになります。はたして、10万円の水を飲んだら、1トン200円の水を飲むよりも何倍も長生きできるのかということになると、わかりません。ですから、皆さんの中にもペットボトルの水を飲んでいる方、趣味の問題として認めはしますけれども、それだけ高い金を払っているからといって、長生きできるかというと我々水道の技術者としてなんともいいかねる。今、我々が出している水というのは、決していい水ではないが、それでもペットボトルにも、よく見るといろいろな物が混じっ

ていることがあります。ですから、ひどいものになりますと、どこで作られたものか分からぬるものも、スナックなどで出されます。暗くて分からぬために飲んでしまいます。考えてみると、水道の水を瓶に入れて出されても味が分かるほど我々は慣れていない。ですから、ペットボトルだからといって安全だということにはならない。水についてはそれぞれ自分の責任で選択するしかないという気がします。問題は、先程申しましたように戦後大急ぎでアメリカの真似をして導入した、急速濾過が今になってよくない、塩素で死なない病原菌が出てきました。いろいろ難しい問題が起こっています。それで多分この太平宿で水道に手をつけるとすれば、常識的には、空間がいくらでもあるので、スペースを十分に取った緩速濾過を採用したほうがよいであろう。というのが、流れとして言えます。それから、もう一つ日本で一番、緩速濾過に詳しい大学の先生というのは、信州大学においてこのあたりが縄張りで中本先生という先生がいます。この人は決して水道の専門家という訳ではなかったのですが、水の研究をしているうちに、緩速濾過のほうが急速濾過よりも結果がいいと、それで、イギリスにいきますと、100年前に作られたものが今全然修理をしないで動いているという事例を集めまして、日本で一番緩速濾過に詳しい先生だと思います。水道に関して中本先生の力をかりるのがよろしいのではないか。

さて、それでは下水はどうするか、ということになります。どうしても我々が普通に暮らしていると、一日200～250リットル、多い所では300リットルの水をつかいます。水洗便所で使う分というのは多くて1／4ぐらいです。結構汚れとして多いのは、風呂、洗濯、台所というものは多いものです。水洗便所の排泄物の汚れよりも量的に多くなります。ですから、最近どうも、川の水が薄汚れてきたという感覚を全国でもつようになつたのも無理のことです。川の上流に人が住んでいてはどうしても川の水は若干汚れます。これまでにも行政ですと水洗便所はたいへん快適な気持ちの良いものである。使つた後、水を流せば出したものが見えない所に流れて行ってしまうというたいへん気持ちのいいものであるので誰しもがつけたいのですが、それをつけるとどうしても水が汚れてしまうし、病原菌の原因にもなるということで、浄化槽の設置が義務づけられます。これは単独浄化槽と呼んでおりますけれども、水洗便所の汚水だけを処理する浄化槽がこれまで各地に作られて、皆さんに使われたことがあると思います。これは実は、非常に緩い基準が前提で作られておりまして、ほとんど機能がなくとも通つてしまうという基準になっています。我々は、屎尿粉碎機と言っておりますけれども、事実上、屎尿を水で薄めて出すだけとあまり変わらない。この批判がこの10数年出てまいりまして調べて見ると、屎尿よりも量の多い台所、風呂、洗濯というようなものまでひっくるめて浄化する合併浄化槽がこの10年ぐらいで広がって来ました。これも後発で技術的にたたかれ鍛えられてきたので今では、国が作る下水道の下水処理場よりも水質が、同等かあるいはそれ以上い

いというものが普通になってくる。ただ単独浄化槽はせいぜい安いものは、20～30万円ぐらいで出来るのに比べると合併浄化槽は100万円前後する。それなりの場所と金を食う欠陥があります。こういう集落でもはなれた所でわざわざパイプをひっぱって下水を集めめるよりは、合併浄化槽でその場で処理したほうがいいという場所もあるかと思います。これは地盤の中までにらんだ上での考え方ですけれども。例えば、1件の家で出てくる汚水を合併浄化槽で処理してしまえば処理した水を水洗便所にもう一回利用できるということもできます。我々が出したものをお飲める水で流すというのはずいぶん贅沢なものらしい話ですから、そういう形での水の再利用することもかんがえられるのではないかという気がします。それから、この程度にまとまった集落、太平宿の中心部ぐらいまとまっている集落だと汚水を集めてきて小さな規模の下水道を作ることも可能であろうと考えます。ここから先はあまりおおっぴらには議論できない話で、つまり下水道を日本で作るということは、必ず管轄のお役所があり、そこからだいたい補助金が出ます。ここでしたらおそらく、環境庁、厚生省、農林省、建設省いろいろな名目がついていて、補助事業をやっております。そうすると、例えばパイプの太さから材質、さらには、ボルトのネジ山にいたるまで細かく決めた規格がありまして、規格どうりにやらないと補助金はやらないという。規格どうりにやるとべらぼうに高いものになってしまう。ですがこれは、各省、自分の所で事業をやり、それで食っている以上どうしてもそういうふうに自然となってしまう。決していいことではないと批判を続けています。税金をぐるぐる回して食っている役人がこんなに日本にいるようでは日本の国は立ち行かなくなるだろうということは以前から警告していることがあります。しかし、今でももっと下水道を、ということでべらぼうに金のかかる下水道を建設する計画は引きも切らない。各省がそれで食っていることは事実です。しかし、30年あまりに下水の処理の研究をしてきてたどりついた結論は、非常に簡単であります、おそらく次の二行につきます。

「金か暇かどちらかがたっぷりあれば水はきれいになる」ということです。それから「なるべく余計なことはしない」よけいなことをすると機械が増えて故障のチャンスが増える。だからなるだけ簡単なものを作る。それから金か暇かこの場合私どもは金はありませんから。むしろ暇を十分にかけるようなことをすれば下水というのは自然にきれいになるということです。このことを一番徹底してやったのがカルカッタです。カルカッタという都市はこれは金がまったくないです。おそらく、地球上でもっとも貧困で不潔な都市の一つだと思います。しかし、カルカッタがたどりついた結論は20日ぐらい下水を浅い沼地の池に溜めると魚が下水の汚れをどんどん食ってくれる。その魚を取って町に持って行き売る。そうすると数千家族の漁民がそれで飯が食える。さらに魚を取った残りの下水はまだ、養分がのこっていますからこれを畑にまいて肥料にする。また、その野菜を持って行けば町

で売れる。下水を水分と養分と両方を徹底的に利用しているのがカルカッタです。暇をたっぷりとかけて、金をかけないという路線です。カルカッタは熱帯ですから、水を溜めておけば必ずそこに微生物の藻類がワンサと湧きまして、それを食うミジンコ、さらにミジンコを食う小魚、小魚を食う大魚、自然の生態系が成立します。一年中暑いところですからこの生態系はきわめて安定です。日本でもやってみたいのですが、例えば太平宿だと冬は水温が下がりますから、あまり魚を飼うのには好適ではない。だから、カルカッタ式は手が届かないのではないかという気がします。次善の策はなにかと、私がオランダに行ったときに教わったエンドレスの溝にブラシを入れてかき回す。浅い池を作つてここに2～3日下水を溜めまして、これを機械で攪拌するというやりかたがあります。これは割合うまくいきまして、栃木市の滝沢ハムですとか、それから臼杵市ですとか、高知の土佐市の光の村という知恵遅れの子供の養護学校がありますが、そこは工場を持っていまして200人位の人間が働いているものですから、その洗濯などの雑排水を処理するこんな池をつくりまして、彼等は自分で土工をやるような技術を持っているので自分達で池をつくりました。そこへ機械を入れると電気の配線だけは自分達でできなかつたので電気屋に頼んでやってもらつたら70万円かかったという話をしています。200人位の雑排水を処理する槽を70万円で作ったというのは日本で一番安く上げた記録だと思います。水を攪拌して空気を入れてやりますと、空気中の酸素が水の中で微生物の発生を助けてだんだんに味噌汁みたいなモヤモヤした微生物がこのなかに生えてきます。一日に何度かこの攪拌を止めますと少し水よりも重い泥は下に沈みますので、分離した上澄みはもう処理されてきれいになつていますのでこれを抜き出す、というふうなことをやりますと、だいたい95～98%ぐらいの有機物は取れてしまいます。今日ここで拝見した限りでは、たぶんこの辺がやりやすいのではないかと思います。どのくらいの池を作るかといいますと、一つの目安としましては、少なくとも2～3日、一番繁盛しているときで200人ぐらいでしょうか、そのためには600立方メートルぐらいの池を作ればいいだろう、深さ1メートルにしますと600平方メートル。二反歩でしょうか、二反歩の深さ1メートルの池をどこかにつくればいいということです。その場所も先程の地図でいろいろな考え方があります。一番低いところに持つて行って自然流下で川に流す、というのが一つの考え方。それから土地の状況によって、例えば高いところに平地があるような場合、上手に平らな土地があるような場合には、むしろ下から上までポンプでくみ上げてしまつて、上手に池を持っているほうが防火用水なんかの点では心強いと言うことがあるかもしれません。それからなにかとやっぱり側溝なんかに泥が溜まる、そういう処理した水を側溝から流すようにしますと地域全体がきれいな水がつなにさらさら流れていることになる。下水というのは立場を変えると毎日出てくる水資源でありまして、水量が一定している点で

非常に心強いということがあります。水質からいうと飲料水には使えませんが、下水の処理水で十分間に合う用途があるわけです。車を洗うとか、水洗便所のような雑用水は十分使えます。ですからそういうものを上手に水源としてもっている場合も考えられる。これは現地を歩いてここが一番やりやすいという場所を探されるとよいでしょう。それは上流であっても下流であってもよい。こうして作った池で処理した水はもう一つ位池を作ればそこで魚を入れておくということもできるでしょう。太平宿は夏は人が来るけれども冬は人はいない、処理する方からいいますと実はかなりありがたいことで、水温が高い所はいいんですが低いとちょっと骨です。特にこういう池を作つて処理する時というには冬は凍る問題がある。ですから冬に人がいないというのはたいへありがとうございます。夏だけ処理場を動かしていればそれでいいということになります。池には適当に魚が入つていて、アヒルでも浮かべておけば卵も取れる。そういう何をいれてやるのかという楽しみはまたこの地図と現場を歩いて計画を立てられたらよろしいと思います。要は、200坪ぐらいの池をどうやって作るかということです。できれば2つぐらい、水処理というのはやってみますとそんなものでして何だばかばかしいことです。ばかばかしいでは飯はくえませんからできるだけ難しく機械を据え付けまして、小さなコンビナートみたいなものをこしらえる。今朝見てきた飯田市の下水処理場はそうであります、こここの小さな町がよくこんなべらぼうな機械を買ったものだ、はたしてこれが動くのかと心配するような複雑怪奇なものが付いております。何のためにつけたかというと、下水処理の時は水と泥を分けるだけですが、水は川に流し泥は流せないためこれに石油をかけて焼く。焼くための炉です。それが20何億かかったという話をしています。こんなものを作るのに億という金がかかるのははず絶対にありません。数百万でできます。自分でやれば、この夏一つ作るという計画を立てれば来た人が少しづつ土手に穴を掘つていればできあがつてしまうというものです。万の桁の仕事です。それでは公社はたてられませんから、いわゆる基準を通るようなものを作れば何億という金額になる。常識的に1人の下水を集めて処理するのにかかる費用がだいたい120～130万という。建設省の公表したデータですら1人130万ぐらいになる結果なります。ですから、ここで仮に200人来たということですでに億の桁になってしまいます。そうやって国民の税金をぐるぐるまわして大勢の役人と業者がくっついている訳ですからここはすすめられない。ここで作るとすればモグリの下水道ということになります。ですがこれは、定住する部落ではないので非定住の集落にモグリの下水道を作つてなにが悪いということです。そのときは別に建設省に届けなくてもいいのですから工夫をして水を浄化することになればそれでいいのだろうと思います。

最初に言いましたが我々の仕事というのは、原形のない所にいきなりヨーロッパの技術を入れてきたものですからたいへんな試行錯誤を繰り返しております、そういう簡単な

技術にしてもこれには補助金が付きません。したがって、日本中どこも作りません。全く同じプロセスで補助金がつくようになったら金がかかります。石垣市の集落で500人ほどの下水を集めて処理する下水道が全部で12億円、処理場は7億円というのを耳にしまして、これと同じプロセスです。要所要所で金がかかるように改造してあります。7億円と言うのを見てどう見ても私が設計すると1千万円を超えることはない。しかし役所が作ると7億円。そういうべらぼうな開きのある世界が水処理の世界です。ここには適正価格というものはない。いかに技術を独占して人をごまかして売りつけるかというのが仕事になっている。ですがこれから7ヵ年計画で23兆円を税金をつぎ込むことになっている下水道整備長期計画という中味はこれです。ですからこういう仕事をしていくと、日本の国というのが成立しているのが不思議に思います。これだけ湯水のごとく税金を使って、そして何とか国が動いているということが理解できない。

一步離れて沖縄になりますと、これでまたメチャクチャな状況でありまして、沖縄に行って13年目になりますけれども、はじめの10年ぐらいはなにをやっていいのか分からぬといふ悪戦苦闘でした。日本にある米軍基地の7割が沖縄にありますと、だいたいその中でも主力になっているのが、海兵隊ですから、いろいろな人殺しの訓練をうけています。町で酔っ払ったりしますと暴れたり人が死んでも不思議ではない、そういう摩擦をしおちゅう感じておりますから、沖縄としては基地を減らしてくれという悲鳴はあります。悲鳴をあげても日本の政府は黙っています。金をやるからだまってろという判断です。3年前に小学生が暴行された。そうしたら日本政府は50億円出して沖縄が自由に使ってくれという。一つの例ですけれども、とにかく沖縄はありとあらゆる公共投資の土砂降り状況でありますと、建設省、運輸省、農林省もみんなそれぞれに何か口実をつけて可哀そうな沖縄のために工事をやっているということになります。その工事が始まりますと、山の上に入つて畑を作るようなことになりますと、雨が降る度に真っ赤な泥が流れ出まして、島が血を噴いているように見えます。そういう中で悪戦苦闘しておりますとにかく、仕事が減らないということになります。早く日本政府は破産して、そして思いやり予算なんていうものをやめて払わなくなれば、米軍も高くつくのでひきあげようということになります。

沖縄での金の使われ方の一例は、米軍から返還のあった天久地区、これから建物が立つところがあるのでここでは、下水処理場から34億円かけて処理水を逆送して再利用する計画があると県庁の役人が自慢気にはなしてくれたのですが、こちらも頭にきて、私はそういうことをやってはいけないとかねがね言っているのに、県庁の役人というのはやってはいけないということから手をつける。事業になるから補助金がつくというそれだけの理由で。それから補助金だけであんなにメチャクチャな金の使い方をされたら税金が

いくらあっても足りない。この計画は白紙に戻すべきだと言ったのですが、会場は大喜びでしたが、県庁の役人は渋い顔をしておりました。

補助金のつくことはやる、逆に補助金がつくということが中央から認められた証拠として沖縄では受け取られる。そこでは独自性のある水の使い方はぜったいにできない。私も今、振りかえって見ると東大の都市工学に21年助手でいたときに、失敗したと思うことがあります。つまり、先日も今の下水道は大変な金の無駄使いで、あまり効果がないので考え直そうという投稿をしました。これは、建設省の諮問機関が下水道の普及などで水需要が増えるところにはダムが必要であるということを言ったものですから、そんな口実に使われたらたまるかということで下水道を考え直せという投稿をした。そうしましたら、建設省の下水道部長が下水道というのは有効な施設であるというような反論を書いていました。それは、実は私の教え子で、大学で実験を教えていました。あまり成績はよくなかったです。ですが、東大にいるときは、学生実験担当であればよろしい。それ以上学生についてとやかく言わないからそちらも黙つていろというのがありますて、だいぶ勝手な自主講座なんかをさせてもらっていたんですけども、そのかわりポストは要求しなかった。例えば、教授、助教授があいているから私を上げろということは一切言わなかつた。ところが今になってみると、それはマイナスでした。デキの悪い学生連中をどうしてもっと鍛え上げなかつたんだろうか、講義をして、そしてちゃんと答案を書かなければ単位を上げないという脅かしをかけてでも本当のことを教えるべきでした、というのを今になつて悔やんでいます。ただ、はたしてそうやって権力の座についた時に権力は必ず腐敗する訳ですから、私が正しいことを学生に伝えられたかということになると分からぬ、と考え込むことがあります。しかし、今の建設省の下水関係、厚生省の水道関係とか、環境庁の課長クラスとなると、だいたい私の教え子がどこかにいるんです。それに対してもつと影響力を持つべきであったというのを今感じます。デキの悪い学生が反論して全然反論になつていないうなものを読まされると、もうちょっとやるべきことがあったのではないかという気がします。今日、振り替えってみると、どうもそこは失敗したかなという気がすることも事実です。

質問

Q：赤坂と申します。わたしは建築家ではなく、造園が専門なんですが、先程の都市下水の話で下水というのは水源として安定しているという話で、千葉県の手賀沼というところがありまして、水質がとても汚れているということで大変有名なところですけれども、うちの大学がすぐ側にありますて、手賀沼のプロジェクトということをやつたのですが、水質のことは専門ではなくて、団地が数年の間に大量にできる、丘の上に大量に売却されそこに団地がはいる。そこで、先程の話で下水というものがどうして沢山できるのかと上水

と下水の境目はどこなのだろうかと考えたときに、流しではないかと感じたのですが、蛇口から出たとたん下水になる。そこを考えると下水は膨大な排水が出て、それが手賀沼に入り込む、100%排水が入り込む。そういう団地から出てくるような水（下水）というのは、真正面に水源としてどちらえることができないのだろうかと考えます。処理の仕方についてもう少し排水なのでた後すぐに処理することができないのだろうか。これは先程の提案の中にあったと思うのですが、現在そういうことは実現されているのでしょうか。

A：まず合併浄化槽は遅いながらだんだん普及してきている。そこから出た水はだいたいBODという水の尺度で5～10くらいというのが常識になってきている。普通下水処理でいうと20ぐらいで流れていますから、それよりもかなりいいということになります。そこから手賀沼という話もありましたが、丘の上の団地では団地を作る時にコミュニティープラントという、小規模の下水処理場の設置が義務づけられています。それはそれでちゃんと動かせば動きます。かなりいい水が出ます。ですからちゃんとした処理場の付いているところもあります。ただそういうものの付いていないスプロール化した宅地で昔から流しているというものが、実は昔からではなく途中で大きく変わってしまったものなのですが、昔は井戸から水を汲んできて使っていたときは、多くて50リットル／1人ぐらいだったものが水の量が300リットル／1人になって、しかも洗濯は自動化になったり水の量が増える、だから汚れるというのがある。それに対して、建設省の出しているのが流域下水道を作ればいい。ところが、べらぼうに金がかかるし、時間もかかる。しかも必ずしも結果はよくないということで私は批判しました。ところが批判はある別の立場から見るとまさに私の批判していることが、例えば金権政治家にとってはプラスになる。下水道を作るとその地域水洗便所がつながるようになり地価が上昇する、そうすると地主は喜ぶ、工事をすると大部分は地下に潜ってしまうものだから手抜きができるから業者が喜ぶ、業者から金がくる、地主から票が入る、20～30年かかる事業だから選挙の度にあれは自分の事業だといえばまた票が入る。つまり、金権政治家にとって、莫大な時間がかかりすぎ効果がない手抜き工事があると批判するのはむしろプラスになる。これを合併浄化槽をこつこつ作らせいいぜい一つの町村でしたら5～6年ですむ訳ですから、選挙の度に手柄にしようとすれば1回～2回しか使えない。下水道だと20～30年は使えるということで金権政治家にとっては金蔓になっている。だから下水道を整備しようという政党はどこかというと自民党、共産党です。しかし、共産党が下水道を整備しようというときに業者から金がくるというのはあまりありそうもない。だけれども、中央で下水道というのは科学的施設であるという規定をしてしまった以上あそこは科学的共産党ですから、下水道を推進せざるを得なくなつた。下水道をいっぺん推進してしまつたから、今でも推進すべきだという話になる。

そういうふうに政治的にもきわめて奇妙な下水道に熱心な政党は自民党と共産党であるという結果です。という訳で下水道は今でも建設が続いているし、不況対策として環境政策だということで進められているだろう。だけど、中味は疑わしい、そういうものを、一つの社会ストックとして持っているということは日本にとって決していいことではない。後から後から金がかかり維持管理も容易ではない、しかもブラックボックスで中でなにが行われているか分からぬ。そういうものよりはまだ合併浄化槽で一軒一軒、ここはちゃんときれいになっているというのが過れるようなもの、あるいは、自分で作った下水道でこれは間違ひなく動きますというもの。そういうものをコツコツ作っていくのが筋ではないか。しかしこれは、金権政治家の道にはのらない困難があります。沖縄でぶつかっている問題もそこです。逆に今も税金をむしって食うには我々の考えはのらない。振りかえって見ますと、東大にいたときもいかに税金をむしって食っていたかと痛感します。というのは、東大の都市工学というのは、建設省と厚生省から一人づつ教授がきていた。それは、自分達の方に変な学生が入ってこないように学生の時から監視しているのです。公務員試験で成績が良かったからといって採用すると、その人の思想傾向が悪かったりするというので、これは問題になりました。成績のいい人をわざわざ厚生省に行きたいというのを学科の推薦状を下げて落とした。自分達の都合のいい学生をとって学閥を形成する、よく言うことをきく大学に対しては国民の税金である研究費を配分して操縦するのです。自分の懐を痛めることは何もやっていないのです。給料から扱う事業費から人を操縦する金にいたるまで全部税金です。その中に私はいたのです。だから今振りかえるとどうしてそのへんをつっこんで暴露しなかったのかという悔いはのこっています。やっぱりあの連中と一緒に飯を食っていたんだという気がします。いかに日本の官僚が勝手なことをやっているのかというのは中にいて、今ようやく分かる。それが当たり前だと思っていたからおかしいと思わなかった。

Q：以前話を伺った、宇井さんが発明されて、学生達が命名されたという石鹼、「ぶくぶく純ちゃん石鹼」の成立過程といまどのように使われているのか、大平宿でも使いたいのですが。

A：あれは私が発明した訳ではありません。住民運動の中でかなり広く使われているプリン石鹼という廃油から作られた石鹼です。食油の古くなったものをを集めまして、これは古ければ古いほどよい、何回も加熱して色が濃くなつたもので、それで石油缶（一斗缶）の中に3リットル入れて100度位に加熱して500グラムの苛性ソーダを入れ、ご飯かソバかデンプンを一食分、そうすると100度をこえているため100度の煮え湯を大きなヤカンで入れますと沸騰します。溢れそうになつたら水を入れとにかく入れないように納めてかき回す。一日目は半分ぐらい入れておしまいで、次の日だいたい固まっていますの

でそこに湯を入れてかき回すと二日目から三日目に缶が一杯になります。そのまま使ってもいいのですが、1～2週間寝かせておくとだいぶアルカリ分がぬけます。ちょうどプリン状のドロドロの石鹼ができます。コーヒーカップ2杯分で洗濯に、食器洗いでしたらよくおちます。一番よく落ちるのが換気扇でした。これは沖縄ではかなり受けまして学生がずいぶん作りました。今でもつかわれています。沖縄は私が行く前にもそういう廃油を使って作った人がいます。ドラム缶の中に廃油を入れて苛性ソーダと煮るというやり方を広めた人がいますが暑くてかなわない、ということであまりやらなかつたようです。ところが今のプリン石鹼というのは最初にコンロであっためてしまうのであとは湯を継ぎ足すだけですからはるかに楽だということでかなり広がつたようです。理屈をいいますと油と水はなかなか混ざりません。水の方に苛性ソーダが溶けて油と反応するのは界面のところで反応する。水と油を混ぜてかき回しても混ざらないんですが、そこにデンプン質を入れますと水の方が糊になり、粘度が高くなりかき回すと油の粒子がちぎれて反応速度が早くなる。もう一つは古い油というのがミソとして脂肪酸とグリセリンのエステル油ですが、これが熱によって切れて脂肪酸が増えてるのが古い油です。そこに苛性ソーダを入れると脂肪酸と反応して石鹼ができる。そのおかげで水と油が混じりやすくなる。天ぷら油もそうして使えば2回使えることですし微生物にとってもおいしい餌ですから、処理場ではほとんど食われてしまう。

ありがとうございました。石鹼作りの話から国際的な環境問題まで洞察されている宇井さんに大平宿を見ていただけで我々感謝しています。ありがとうございました。

(うい じゅん・沖縄大学教授)

昨日・今日・明日

1998.5～1999.7

吉田桂二

●「エコロ21住宅」のその後

仙台と熊本にモデルハウスが完成したが、以後、建てられてはいない。5寸角という流通を外れた材を使うには、量的需要を確保しなければ、おいそれと造るわけにはいかないからである。

昨年の「生活文化」でレポートしていた、八溝材を使った「茨城の家プロジェクト」は実施部隊の茨城県住宅供給公社の腰砕けで挫折したが、今年はこれを民活型で実施しようと、この春から月2回の研究会と既成住宅団地の見学会が行われている。秋にはモデルとしての数棟を計画できる段階にしたいと思っている。このイメージには松本昌義も加わった。

「エコロ21住宅」を実施例の一つにしている、彰国社の「暮らしから描く」シリーズの第3弾、「キッチンと収納のつくり方」は、島田・西岡・勝見・西山・女性軍との共著で近々発売される。

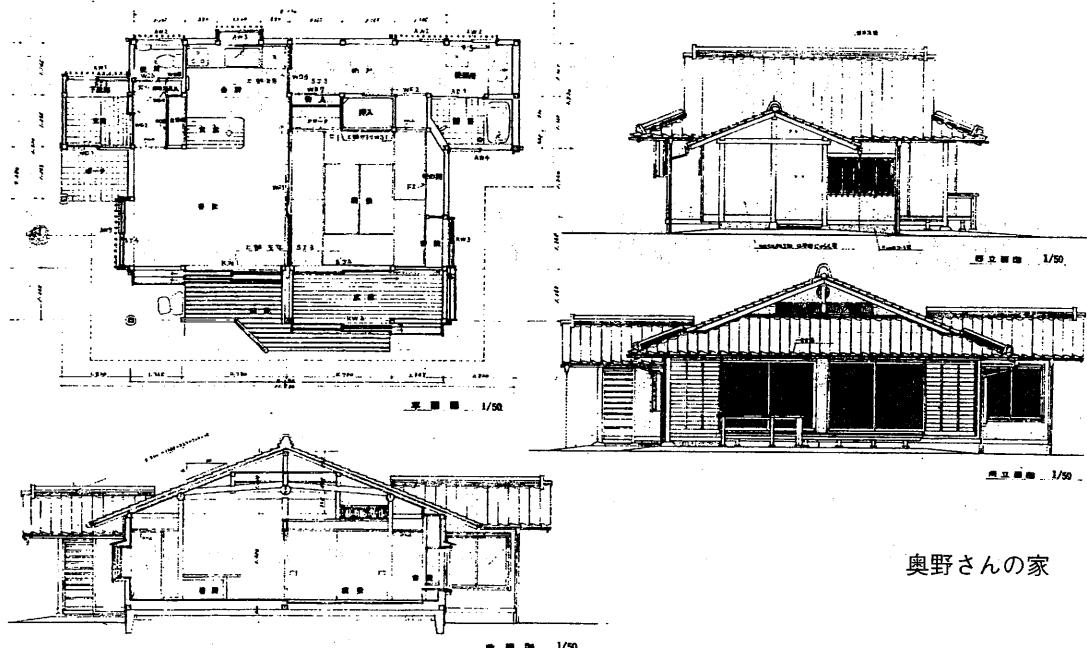
●住宅

昨年の「生活文化」で工事中と書いた小室さんの家は、昨年竣工している。庭が北にあるので、部屋が南北に重ならないため、通風抜群の家になった。

同じく荒川さんの家と奥野さんの家も竣工している。前者は2世帯住宅、後者は離れ屋である。



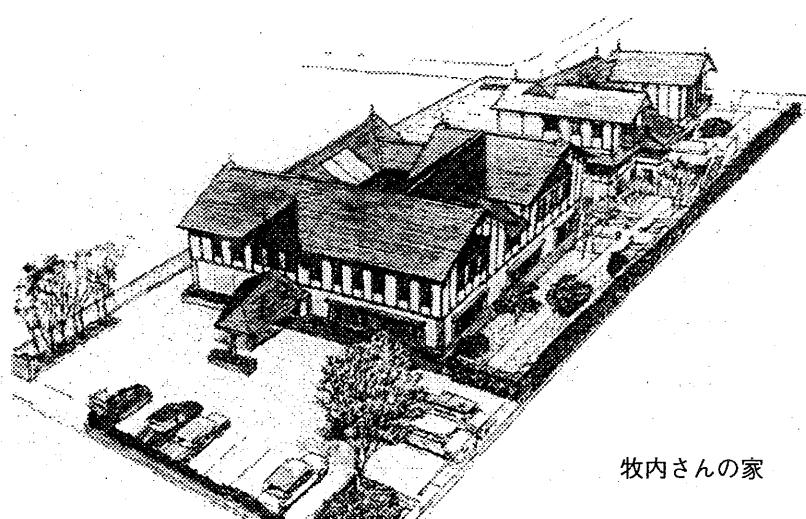
小室さんの家



同じく、設計中と書いたつくば市の牧内さんの家と、岡山の佐野さんの家は目下工事中。前者は会計事務所と住宅で、敷地は600坪、延べ300坪弱の建物。この7月末に完工する予定。洋館風の町並みになった。工事は「古河文学館」を施工した河本工業で、大工棟梁は古河の吉田健司。後者は年内完工の予定で、佐野さんのPRが行き届いているので、「民家再生工房」の人達などが大挙して見学にきている。敷地は200坪、述べ80坪弱の豪邸で、丸太梁はもちろん、

差し鴨居にも地松
の無節が使われて
いる。工事は藤木工
務店。次ページの
パース参照。

他には、伊那市の
南信コスモのモデ
ルハウスが完工し
ている。次ページの
プランと写真参照。

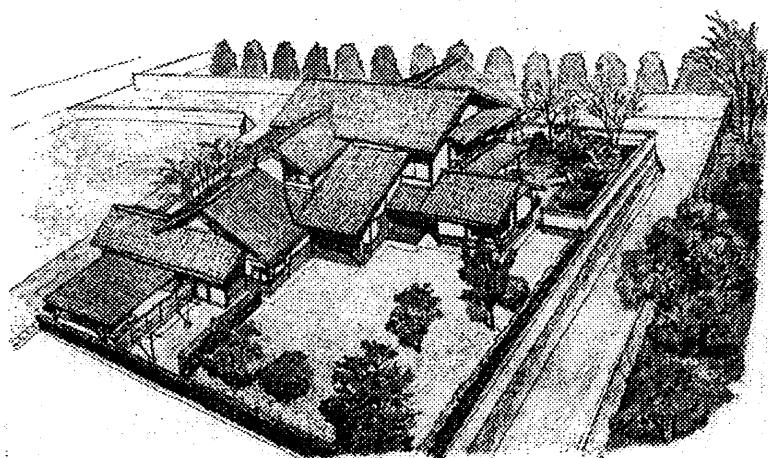


牧内さんの家

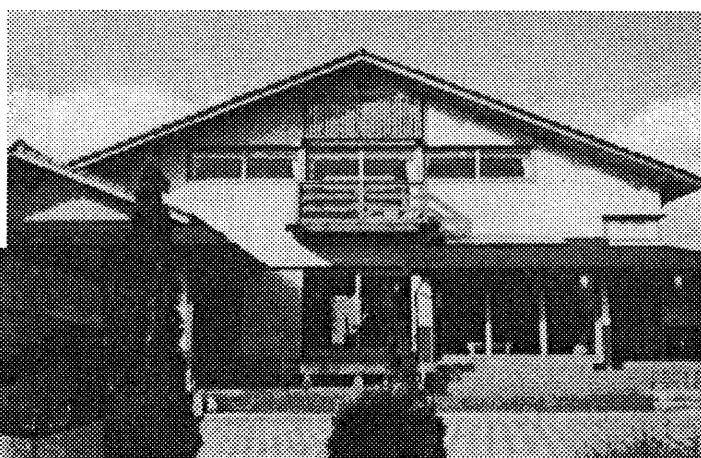
南信コスモ・モデルハウス

ルハウスは、住宅展示場の中の1戸として建てたものであるが、モデルとはいって、規模はかなり大きく、「エコロ21住宅」の展開にはならなかった。

南信コスモという住宅会社は、これまで 2×4 で造ってきたのだが、これからは伝統工法に切り換える計画で、勝見紀子が社員の教育に当っている。



佐野さんの家

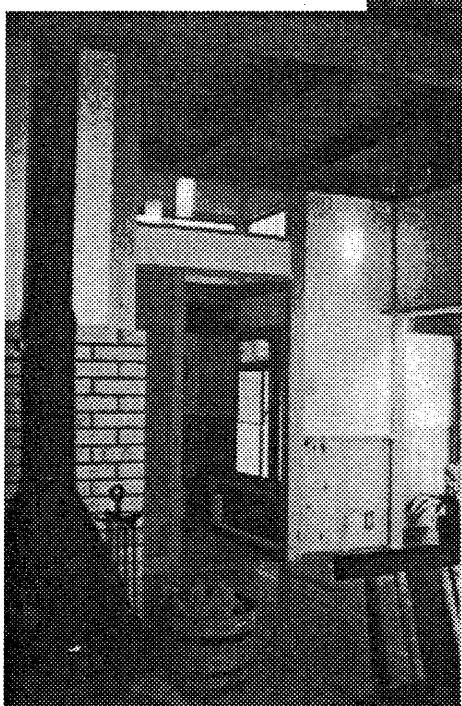


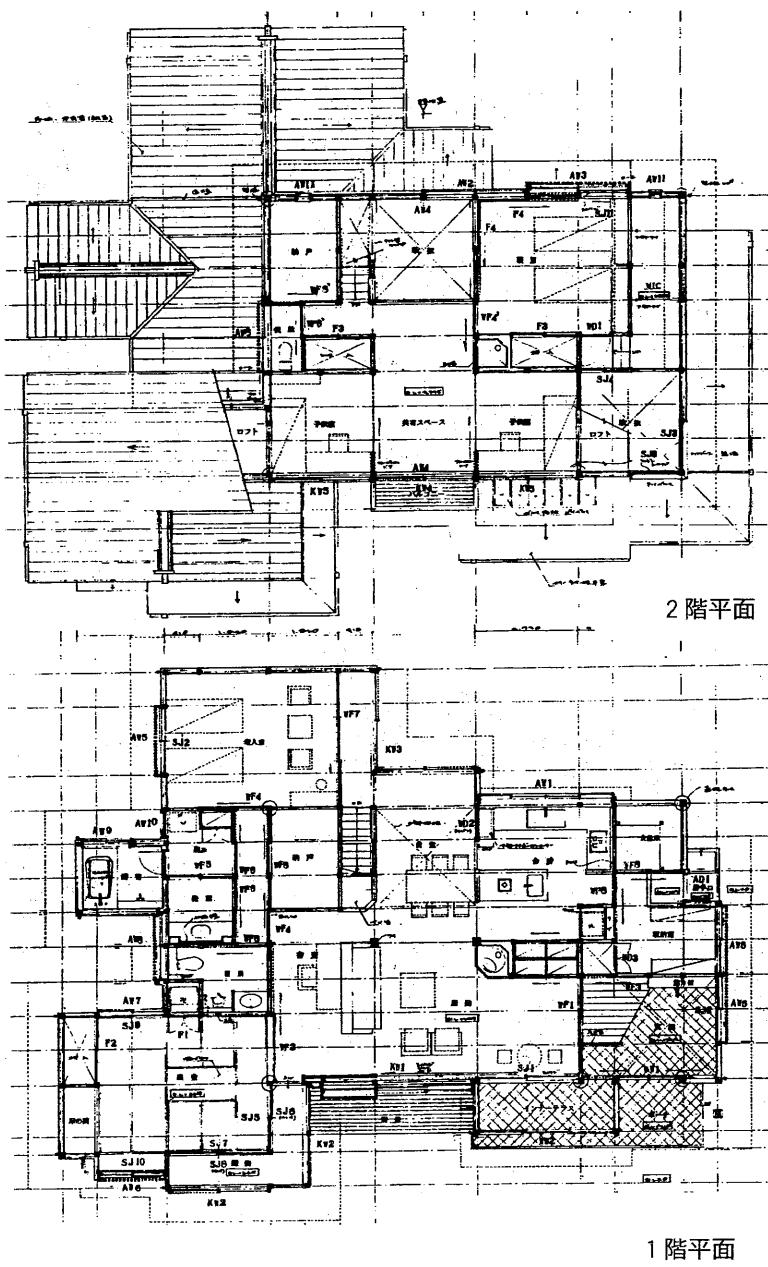
南信コスモ・モデルハウス

●公共建築

愛知県一色町の渥美湾内の離島、佐久島の西港に、民家再生で建てたコミュニティセンター「べんてんさん」が昨年末完工した。名称の由来は、この島に著名な弁天様の社があることによる。

港に面した所に建っていた民家を町が買い受け、再生不能な部分は撤去し、増築部分を付加している。再生部分は4間×7.5間=30坪の2



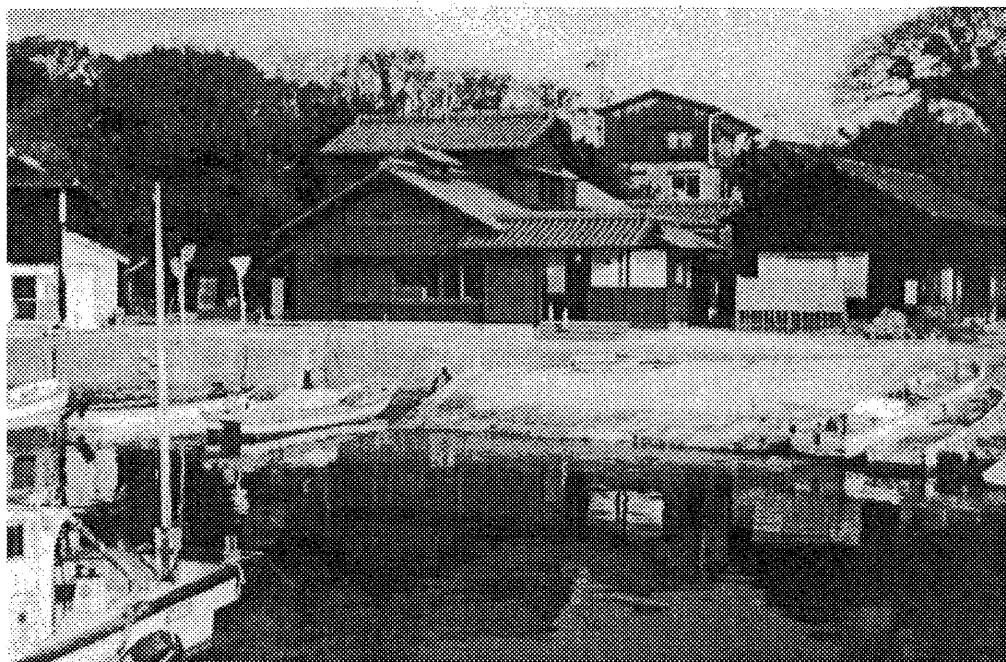


階建である。再生した1階の4間×5間の部分にある5室の畳敷きの部屋は、中に大黒柱2本を立てた連続空間なので、これを区切る建具を柱から外して、邪魔にならない所まで引けるようにし、さまざまな規模の会合に適合させることにした。民家の内部空間は、建具を外せば全て連続するが、この空間性能は集会施設としてうってつけてある。

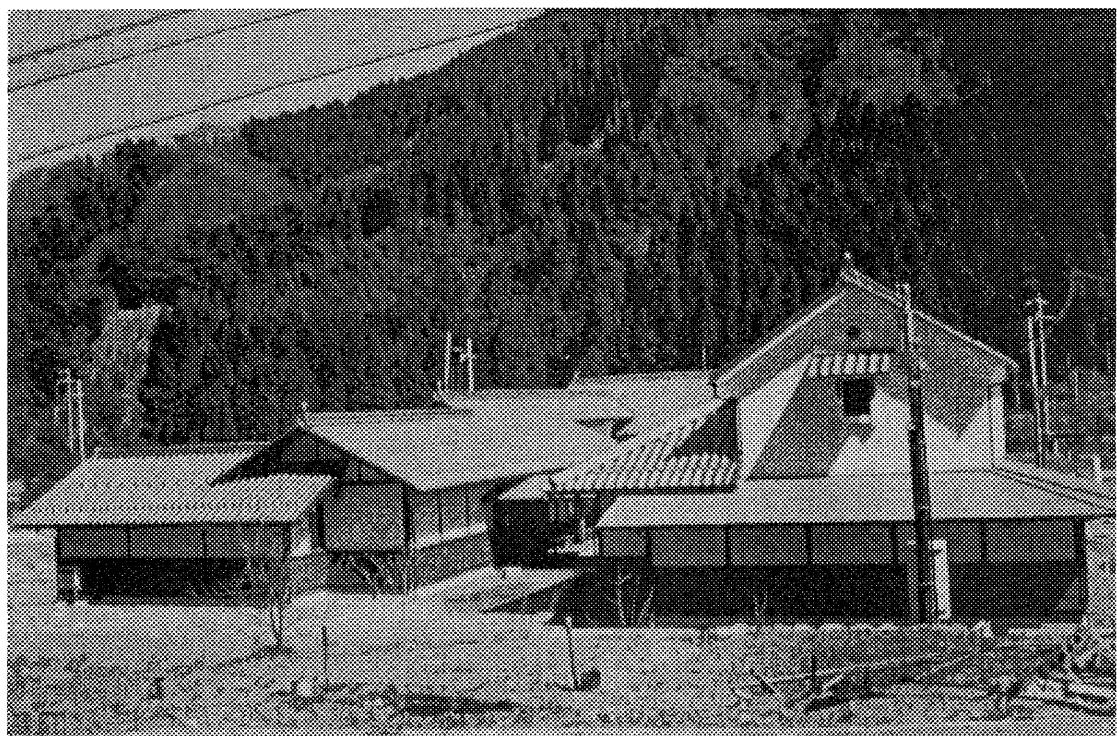
この作品は建築資料研究社の建築設計資料の70、コミュニティセンター2に、詳しく発表しているので、図面などは省略する。次ページは海からの外観。

福井県上中町の重

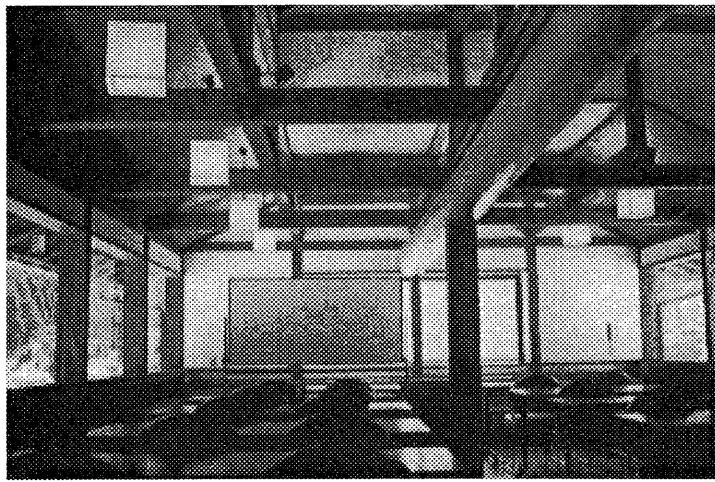
要伝統的建造物群保存地区の熊川宿の玄関口に、「道の駅」がこの春完工した。「道の駅」という施設は、県が造る部分と自治体が造る部分があって、県の造る部分が秋にならないと完工しないため、まだフル稼働するには至っていない。次ページの外観は自治体部分で、この中にはレストラン、物産館、展示館などが収められている。この建物の名称は一般公募して選定し、「四季彩館」と名付けられた。



「べんてんさろん」



道の駅「四季彩館」



「道の駅」のレストラン

古河市の歴博に隣接した「古河文学館」が昨年の初夏に完工、秋に開館した。この文学館は、古河出身の作家、永井路子さんの蔵書の全部を寄付され、これを収蔵して、古河にゆかりのある作家の著作などと共に展示する部分。永井さんのコレクションであるモーツアルトのSPレコードなどを演奏したり、文学を語

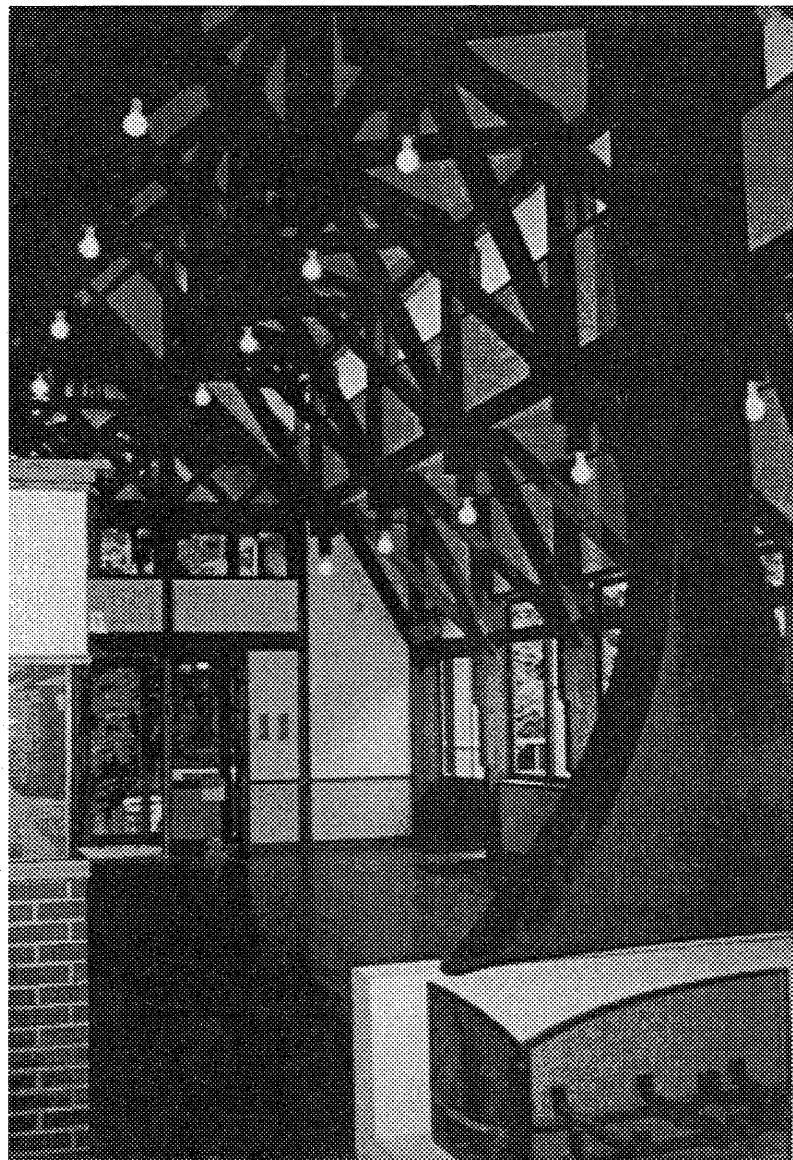
る集まりにも使える文学サロン、講座室などを1階にしているが、2階には歴博側からも入ることのできるレストランを設けている。レストランを設けた意図は、文学館という種



古河文学館

類の施設は利用度が低くなるおそれがあること、もう一つは、歴博に飲食する施設がなかったこと、この二つである。「唐草」と名付けられたこのレストランは、幸いなことに開館以来、よく賑わっている。

建物の構造は、展示室と収蔵庫が耐火性を考慮してRC造、その上の2階は木造のレストラン、平屋部分は、2階屋根が流れ下るような形で木造なので、外から見ただけでは全部が木造のように見える。文学サロンとレストランは4間梁間の天井の高い空間にし、集成材ではなく普通の角材を組み、金物はボルトのみの「和風トラス」にしている。屋根勾配はカネ勾配、45度である。この「和風トラス」は、材が集中する部分で、貫通材を多くしたいため、縦材に4本の3寸角を束にして挟んでいるところがミソである。方杖の角度が決め難いので、大工棟梁の吉田健司さんは、かなり苦労したという。彼曰く「これができりや、あとどんなのがきたって、できる」。主な木材は、設計中から手配して八溝の中目材を使った。

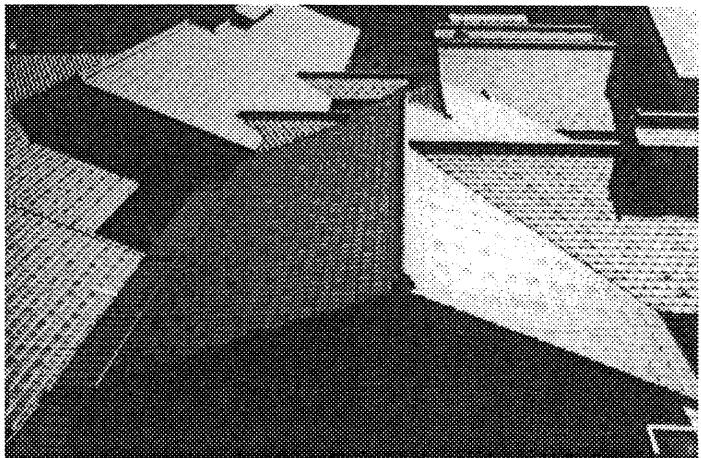


古河文学館2階のレストラン

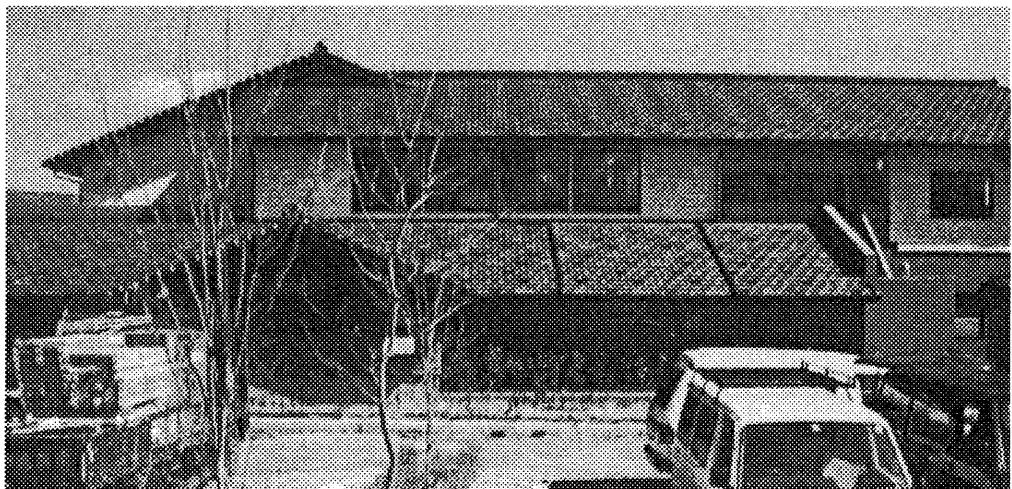
文学館の開館から少し遅れて、歴博やこのエリアへの導入路の角のポケットパークが完工した。

熊本県小国町の老人保健施設がこの春完工した。町の中心部にある公立小国病院に隣接して、田圃が残っていたのは幸いであった。老健は、ここでケアした後、社会復帰する施設だから、町の中にあるのが理想なのである。

和みのある建物にしたいということ、小国は杉の林産地であることから、木造にする方針を定めたものの、述べ 3000 m^2 という規模、福祉施設であることでの防火上の規定、自然木を使うことでの構造計算上の問題など、クリアしなければならない法的な問題に立ち向かわざるを得なかった。プランは1階を入所者のエリアとし、2階を健常者の使う会議室、喫茶室、ボランティアルームなどとし、2階の床までをRC造としたが、それはごく一部、大半が平屋建になつて、各所に中庭のある甍の波となった。「町に溶け込んでいる」という評価を受けたのが嬉しいことであった。



平屋の屋根の連なり



南側からの外観の一部

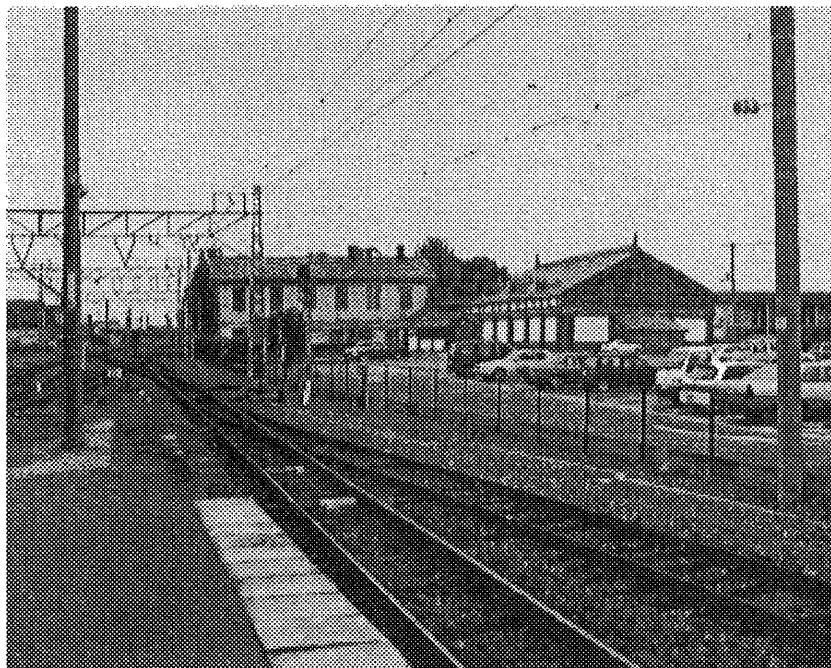
●進行中の仕事・これからのはじめ

日本ナショナルトラストの第5番目のヘリティジセンターである。「長浜鉄道文化館」が着工したところ。これは一昨年から計画はあったが、資金面などで遅れ、今年度のトラストの事業として決定したので、あらかじめ設計に取り掛っていたものを急遽まとめ、この6月26日に起工した。

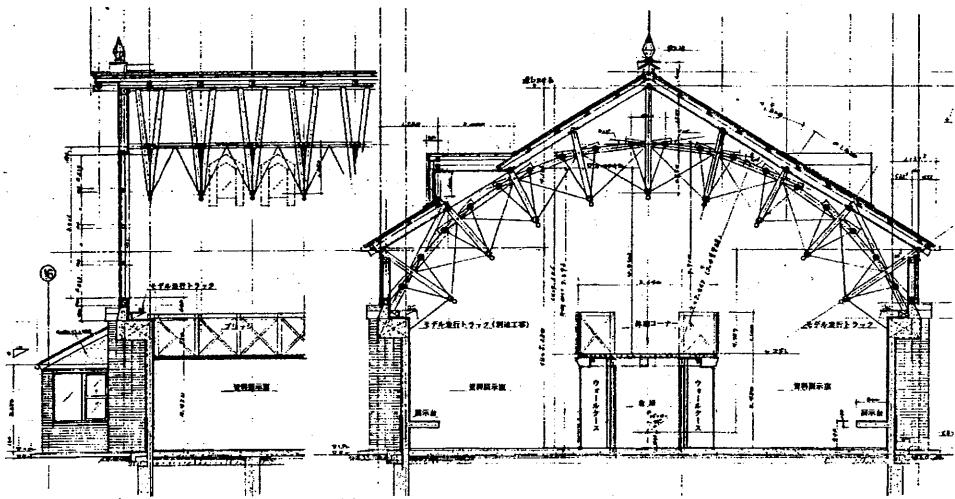
JR長浜駅の構内には、敦賀から長浜に至る、東海道線よりも早く全通した路線があり、長浜駅は、ここで琵琶湖汽船に乗り換えるターミナル駅であった。その駅舎は日本一古い駅舎として保存されている。このヘリティジセンターは、この駅舎と接続し、展示室を主体とする施設である。この建物を建てる位置は駅舎とは直角をなし、この二つの建物でL形に抱えられたエリアがターミナル駅としてのヤードである。

この建物の内部空間でのねらいは当然展示室にある。約8間×10間の大空間を、5寸の丸太とボルト、ワイヤーだけで架構できないかというのがテーマであった。ヨーロッパの鉄道のターミナル駅は、鉄骨造のアーチになっていることが多いが、あの雰囲気を素木の丸太で造るわけである。RC壁構造の底部との混築がよいのではないか。中央の天井が高くなるから、中2階が中に取れる。RC壁の上部は建物を一周するから、ここに鉄道模型を走らせたらどうか。中2階からそれを眺めたらおもしろかろう。

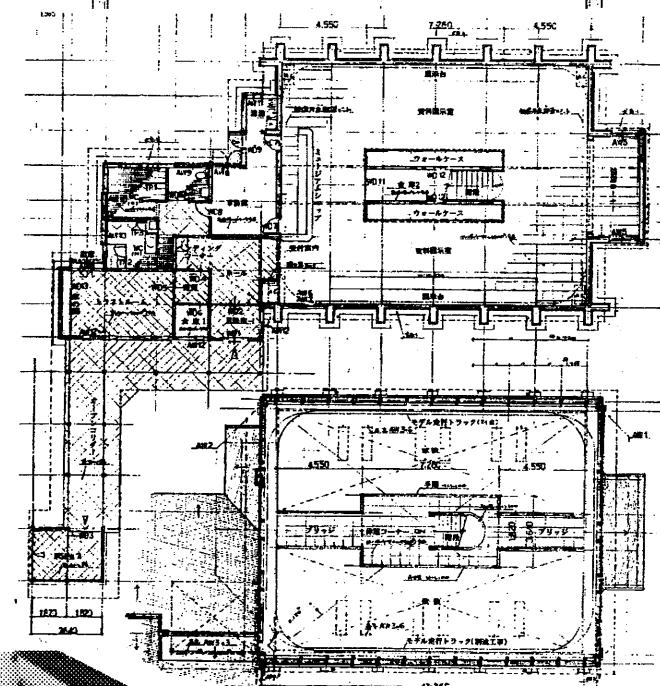
こんなアイ
デアでまとめ
ることにした。
まだまだ樂し
い計画はこれ
からも考て
います。



JR長浜駅のホームから見た図（デジカメモンタージュ）

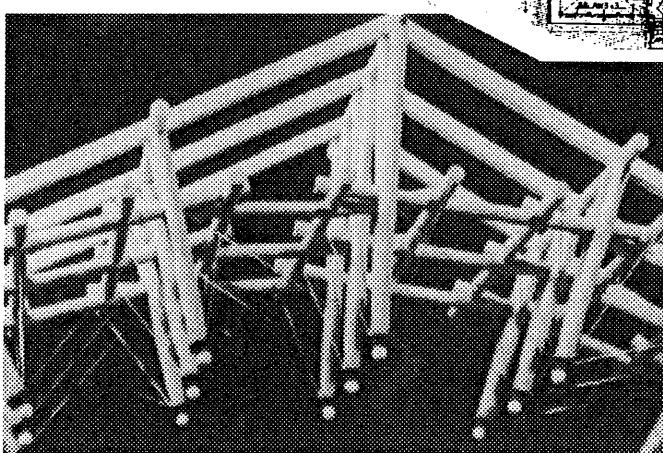


展示室断面図



平面図

丸太アーチの模型写真



大洲では、以前に「町づくりの指針」を提案しているが、その中の一部として、歴史的街区である「おはなはん通り」を中心としたエリアを対象に、ここを何らかの法的保護を持った地域とすることが目論まれている。

そのためには調査が必要なので、これを人海戦術で行うため、建築士会大洲支部の人達に、85戸全ての平面、立面、通り側矩計の実測をしてもらい、これを2冊の「おはなはん通り及び周辺地区建物調査報告書」としてまとめたところだ。今年はこの地域の建物のありようを定める法的内容を立案することになるだろう。

内子の大瀬では、以前にホープ計画を提案しているが、これを実施するため、今年は「街並み環境整備事業」の基礎となる資料づくりの調査に取り掛かる予定。ホープ計画で提案している旧村役場の保存改修工事が完了し、「大瀬の館」として、7月10日に開館されることになった。大瀬の公共建築のエリアの再計画も徐々に進行している。

●出版・個展・受賞など

○新しく出版したのは2冊

- 「絵ごころの旅」鈴木喜一・白鳥健二との共著・東京堂出版
- 建築設計資料70「コミュニティセンター2」建築資料研究社

近々出版されるのは2冊

- 「小さくつくって広く住む間取り」講談社
- 暮らしから描く「キッチンと収納のつくり方」
島田眞弓・西岡麻里子・勝見紀子・西山珠美との共著・彰国社

○昨年の第19回個展は

恒例のアユミギャラリーで11月6日から18日まで、
テーマは二つ
「橋のある風景」12景と「重要文化財民家」10点

○受賞

今年の受賞はこれまでに2つ

●古河文学館が

第12回茨城建築文化賞・最優秀賞

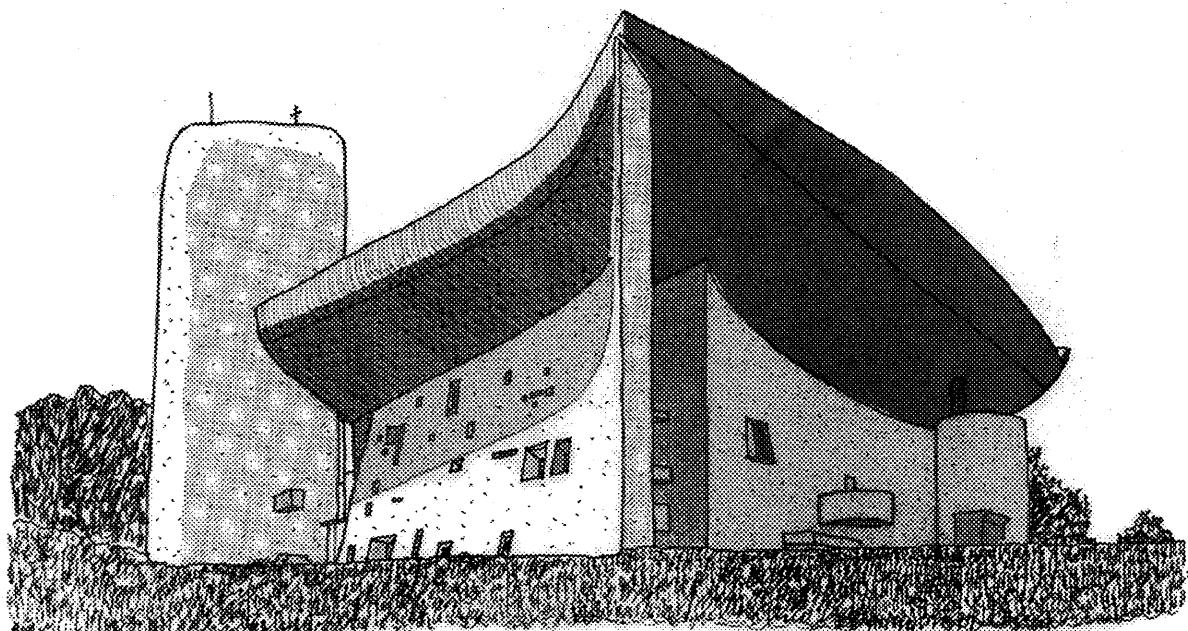
●大乗院庭園文化館が

第10回観賞・景観賞

1999.7.8



私の好きな建築



La Chapelle de Ronchamp
/Le Corbusier
1955

同潤会江戸川アパート

伊郷 吉信

私は東京の神田川沿いの商店街の中で生まれました。神田川は、今でこそ、治水が整つてきましたが、子供のころは毎年のように川が氾濫し、周辺の家は床上まで浸水しました。そのころ二階建ての家は少なく、平屋で鴨居近くまで浸水した家では天井を破り小屋裏に逃げ込んでいました。その後、昭和30年代後半から40年台には二階建の家はまたたく間に広りました。また、R C 造の建物は、震災後の建てられた学校ぐらいで、今のようにマンションやアパートはほとんどありませんでした。

同潤会江戸川アパートは子供の頃の遊び場の一つでした。こっそり忍び込み階段を上がり屋上に出ました。秘密の場所だったのです。神田川沿いの低地は職人と中小の工場がひしめく場所でした。同潤会江戸川アパートの屋上からは町の様子が一望できました。夕暮れ。深紅に燃える西の空をながめ、神聖な気持ちになり時間を過ごしました。少年は神秘とゆったりした時間の中で成長してゆくのでしょう。暗い廊下から聞こえてくる足音にも迷宮を行く探偵になった気分でした。これらの体験は大人になった今も変わりません。

集合住宅の意義は高密度の住む事です。孤独であると同時にと生活を分かちあう事が、ここでの暮らしやすさのバロメーターになってきます。背中合わせの概念とも思われますがここではそのことがよく認識できます。建物は昭和9年につくられました。当時はエレベーター、共同浴場、社交室、理髪室などを完備したの高級アパートでした。築後65年を



経て痛みも激しく、鉄筋が剥き出しの壁もあり補修もされないまま放置されています。近々建て替えの話が出ています。

江戸川アパート：東京都新宿区新小川町2-10

私の選ぶ建築家

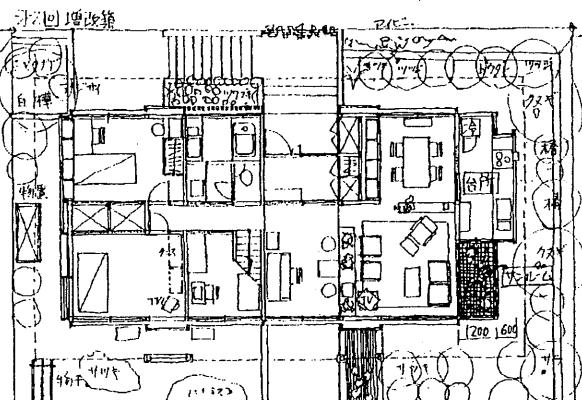
平成10（1998）年3月に、昭和を体現してきた建築家みねぎしやすおが他界した。一月あまり前に事務所のOB会に元気な姿を見せていた氏が突然逝ってしまったことを知らせるファクシミリに愕然とした。

私は昭和63（1988）年12月から平成2（1990）年11月までの2年あまりを連合設計社みねぎしやすお建築設計事務所でお世話になった。本格的に住宅の設計に携わる入口であり、今日、同人をはじめ多くの仲間に巡り会うきっかけになった事務所である。氏の締めくくりの時期の2年間という短い時間を共有した私が、氏の全体像を理解しているわけではないので、氏の著作『「私とすまい」の履歴書』を頼りに氏の輪郭をたどってみたい。

氏は大正14年に誕生している。物心が付き始める2～4歳の記憶の断片と実姉の聞き取りから当時の住まいの平面図を起こしている。既に幼少の頃から住居に対する思い入れは始まっている。「昭和を体現した」とは建築家になる以前の素養を含めて言っている。それから父の勤務の都合と家族の成長に合わせて、10回ほどの転居を重ね、それぞれの平面図とその家の思い出を書き下ろしている。その平面図を追っていくと、その後の氏の家づくりの原風景が想像できる。住まいとそれを取り巻く環境およびそこでの生活風景が脳裏に焼き付き、設計する際に再び現出してきたであろうと思われる。

昭和という時代がそうだったように氏にとっても、戦争とその後の民主化への移行は大きな位置を占めている。戦後の復興期に東大の池辺研究室で、後に連合設計社を共同設立する吉田秀雄、吉田桂二、小宮山雅夫らと共に住居の研究に没頭する。世の中は住宅の大量供給が社会的命題となっており、公庫融資条件の延べ面積25坪以内という制限で、「これからのお住居」が模索された。池辺陽の『立体最小限住宅』はその代表作である。建築家の目指したこの時期の住居は、独立した玄関、床の間、縁側などの和風のヴォキヤボラリーを排し、DKタイプの間取りやワンルームタイプが主流になっていた。十数年後に建てた自邸のプランは、この頃のコンペに入選した「3寝室23坪の住居」をベースにしている。氏の住宅の設計手法はほぼこの時期に完成している。

設計スタイルとして、立体的な空間構成から設計していくタイプと平

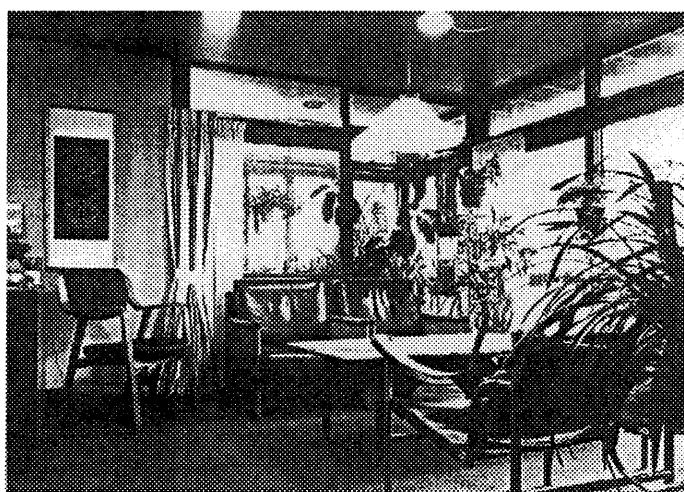


面を優先的に決定し、立面を後から立ちあげるタイプとがあるが、氏は明らかに後者である。しかし、その場合でも立面を立ちあげてみると見事に造形をなしているのには、当時、驚きを覚えたほどである。造形を検討するために模型をつくることは一般的に行われるが、事務所ではイメージ模型ではなく完成模型だけだった。敷地の大きさと部屋の機能によって、ほぼ3尺または4尺のモデュールのグリッドプランニングを採用していた。敷地の形状によってはF.L.ライトの影響が見られる60°グリッドや45°振ったプランニングを行うこともある。特に空間の緊張感を左右する目地や額縁には神経を注いでいた。立面を検討する際は、1、2階の壁面をずらしたり、2階を張り出したりして造形的にまとめていった。晩年まで精力的に自分で図面を描いていて、時には食事を忘れて描き続けるので所員の方が音をあげることがしばしばあった。

400軒余りの住宅を設計してきたという氏の作品群の中でも自邸は私の最も好きな作品である。構造的なバランスがよく、家族への愛情と自然に対する慈しみが随所に現れている。2.4mの開口部に素通しの引違いガラス戸を嵌め、欄間から入る光と風が心地よい。間仕切りを極力少なくし、フラットな天井を連続させ、小さい床面積でも広々としている。氏の設計する約半数が木造であるが、その中でも数少ない真壁造りである。家族の成長に合わせて3回増改築を行っている。年月が経るに従い芝庭にはだんだんと草木が増し、池の中では生き物が毎年代替わりをして、すっかり自然に囲われている。氏は特に庭いじりを好み、模型に添える点景の植樹の際も本人が率先してやっていた。

氏の作品はどれも住まい手に優しい住宅である。生活している様子が手に取るようにわかる。これは長年にわたり人々の暮らしを注意深く観察してきたためであろう。コンセプチュアルな建築を好まなかったのは師の池辺陽に負うところが多いように思える。若いときによく癪癥を起こしたと先輩に聞かされたが、その気骨は施主の暮らしを徹底して守る

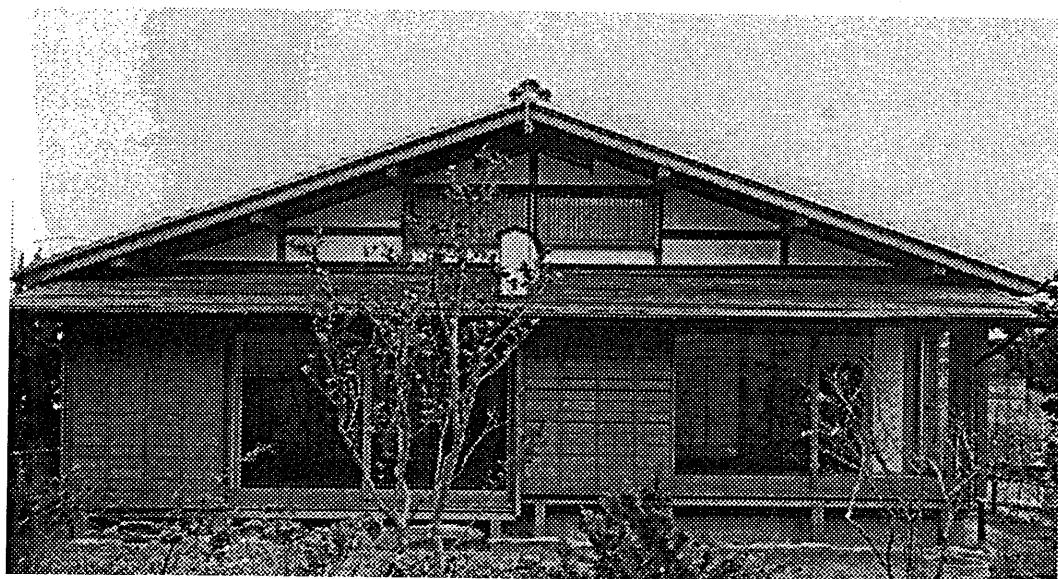
という姿勢に貫かれているようになる。私には今、氏の住まいづくりの姿勢に対するあこがれと時代の要求に応えなければならないという焦りとの葛藤がある。



江原 幸壱（木の建築設計）

20世紀の建築

まだ高校生のときにアルバイトをしているときにこの建物を見た。建築を知らない自分にとってこの建物は周囲の建物に比べてとても新鮮だけれども、どこか懐かしいような、そこに存在しているのが当たり前のような建物に感じられ、この時に建築をやってみたいと思うようになった。自宅に帰り父親に近くにこんな変わった建物がある、平家で小さいけれどもなんかいい建物だ。親父も建築をやっているのなら建物を見たほうがいいよ。(親父は建築をやっている)。と言ったところ、「ああその建物か。その建物を設計した人を知っているよ。」といわれた。その設計者が吉田桂二ということを教えられた。その後、大学の建築科に入学して建築を勉強?して連合設計社にはいることができた。今回の20世紀の建築というテーマからははずれてしまったかもしれないが、建築を知らなかつた自分にとって偶然一つの建物との出会いで建築をやってみたいというきっかけになった建物である。自分が見て好きな建物はあるけれどもやはりこの建物が自分にとっての、20世紀の建物だといえる。



連合設計社 大久保 歩

好きな建築などありやせんがな！

加藤雅久

人は建築を好きになれるのだろうか。商業施設などは好きなときに好きな場所だけ見ていればよいから、そういうものを好きな対象に取り上げるような無責任なことは考えないことにする。では住宅はというと、これがなかなか難しい。好きな部屋や間取りは思い付くが、こういう家がいい、と思ったことはない。立体作品として好きになっても、住むことを考えると途端に行き詰まる。

私が好きな家は、相反する要素が同居している。洞窟と宇宙ステーション。本や機械が密集した小部屋と、ソファが一つ置いてあるだけの広間。熱帯植物が茂る温室と、白一色の無菌室。こんな家作れるか？作れないよな。

人に「どんな家に住みたいですか」と聞くと、生活の場面ごとに異なる要求が返ってくる。同じ人に異なる時期に聞くと、また違ってくる。設計者からすれば、ちぐはぐな意見の施主を説得しながらどのようにまとめるか頭の痛いところだが、そのような「ちぐはぐ」は極めて正常かつ自然な結果であり、その人が生きているあかしだと思うのだ。ただ、実際の生活では、建築の実体としてのまとまりのなかで自ら行動を規定しなければならない。普段私たちはその自分に課したルールを意識しないが、ホテルやレストランなど分不相応の場所に行くと「かしこまった自分」として顕在化する。

人と家が仲良くなれないのは、その空間的・時間的スケールとも関係があろう。例えばおもちゃは好きである。両手で扱うことができるし、電動でも電池を抜けば止められるから、おもちゃに行動は規定されない。飽きたらハイそれまでよ、である。一方、都市は人間の知覚を超えたスケールだから、自分の都合のよい断片を切り取って「好き」と言つていればよい。都市と自分が「向き合う」ことをしなくても許されるのだ。家はそうはいかない。ある期間そこに生活を拘束されるし、家のつくりに自分を合わせなくてはならない。

同じ等身大の世界でも、家と人とはまた違う。人が人を惹きつけて止まないのは、ちぐはぐなところや弱い部分を分かってくれるとか、お互いが相手の言動に影響されて自分も相手も変わっていくとかいうことがあるからであろう。人が互いに変わっていくように、家も住人とのかかわりのなかで自ら変化していくか？しないな。自分の心の矛盾を受入れてくれるか？くれないな。

だから、家は「便利で安心できる存在」であっても、年月を経て「味わいのある存在」になつても、やっぱり「好き」になるのは難しい。

(かとうまさひさ／住み継ぎネットワーク)

八ヶ岳高原音楽堂 1988

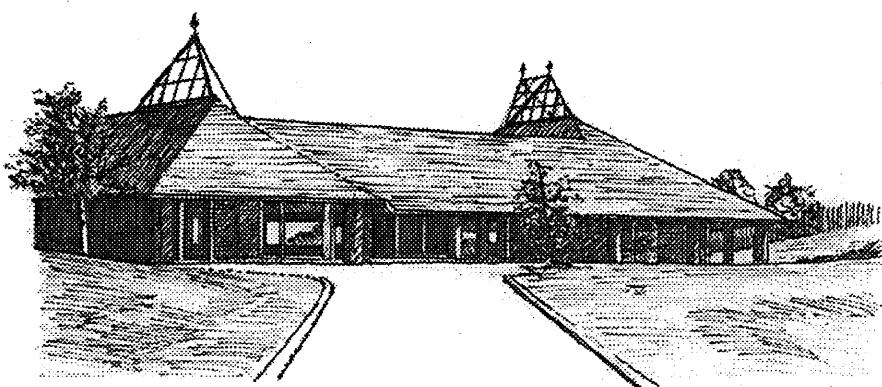
設計：吉村順三設計事務所 構造：大澤構造設計事務所

八ヶ岳山麓の南東斜面、JR線最高地点のある野辺山からほど近いリゾート地が建物の敷地である。私自身も夏の休暇でこの地を訪れた時、実際に見る機会を得た。ガイドブックを頼りに八ヶ岳高原ロッジの建物脇を抜けると、樹木の間から音楽堂が顔を出す。遠巻きに樹々が取り囲んだ芝生の緩やかな丘に建つため、建物は思いのほか小さく感じられると共に、大きな屋根面と低く抑えた深い軒をもち、周りの自然に溶け込んだ優しいフォルムをしている。訪れた2回とも残念ながら中に入ることは出来なかったが、ホール・ホワイエは必要最小限の壁を残して全面開口部ともいえる開放的な空間を構成し、外からでも小屋やトップライトの様子を覗うことができる。

この大架構小屋組は三角形を組合せたトラス構造になっているが、集成材ではなく無垢材を用いている。さらに、複雑な仕口となるために初めは金物でのジョイントが検討されていたそうだが、最終的には全て在来の仕口で納めてあるということに驚かされる。用いられているムク材は、樹齢70～90年という地場の唐松だそうで、「あばれる」と云われるカラマツを見事に使いこなしている点にも感心させられる。設計者は、「木造のあたたかさ」を表現するにあたって集成材を用いるのは「適切でない」と述べており、こうした難しい試みに挑戦するに至ったようだ。しかしそのような点を予備知識として知らなかつたとしても、この建物の外観や空間から受ける心地良さには変わりはないと思われる。強烈な設計コンセプトを外部に対して表現するというのではなく、自然環境に対して応答するような形体、地場の産業という文化的側面をも取り込んで生まれた建物であることが、私の琴線に触れたと言えるだろう。

当然、音響に関する性能もチェックされ音楽堂としての機能も満たされているので、夏の夜などコンサートもよく催されている。この次はバイオリンの奏でる音色に身をゆだねながら、ここで夏のひと時を贅沢に過ごしたいものである。

(岸 未希亞 連合設計社市谷建築事務所)



M. Kishi

煉瓦の境界

北原泰邦

1872年（明治5）年、大火により焼け野原となった東京銀座の地を、火災に強い街並みに造りかえる試みがなされた。明治政府は、ヨーロッパの町並みを手本とした煉瓦石造の都市造りを目指し、5年の歳月をかけて、この地に一大煉瓦街を造成させた。《銀座煉瓦街》の誕生である。「石室は英京の倫敦を模し、街道は則ち仏京の巴黎に擬す」（『東京新繁昌記』）とあるように、確かにそこは、文明開化の象徴と呼ぶにふさわしい様式を備えた場所であった。やがて鉄道馬車が走り、新聞社や西洋料理店が軒を連ね、文化の発信源となっていくこの地では、さまざまな人が行き交い、煉瓦へのさまざまな思いが醸成されていく。その意味で《銀座煉瓦街》は、まさに近代日本を映し出していくひとつの出来事だと言える。

その鋭敏な眼差しで明治の時代を評した北村透谷は、「漫罵」（明治26年）という評論の中で、銀座の街並みについて述べている。透谷は「或いは白壁に塗するあり、或いは赤瓦を積むもある」銀座の街並と人々の様子を、和／洋が無秩序に入り乱れた象徴的な出来事だとして、「今の時代に沈黙高調なる詩歌なきはこれをもってにあらずや」と嘆く。ここには、急激な西洋の物質文明の移入に対する批判が見てとれるとともに、街の意匠（デザイン）を考える上でも興味深い問題が込められている。いくら強固で優れた外観を形成しようと、それらを統一する思想が根底になければ、本当の意味での魅力ある町並みとしては映らない。透谷の感じた違和とは、煉瓦建築の強固な造りとはうらはらの、あまりにも表層的で脆弱な思想とのズレが生んだものと言えよう。図らずも《銀座煉瓦街》は、こうした明治の日本が抱えてきた問題を象徴的に語っている。

例えば、明六社の啓蒙思想家たちは、このような近代化をめぐる問題にいちはやく警鐘を鳴らしている。西周は「煉瓦石造の説」（明治7年）のなかで、「堅緻方正（強固で正方）」な煉瓦石造建築の性質になぞらえて、「人民の権利」を堅実に守ることが、強固な国家を造りあげると論じる。また、津田真道は《銀座煉瓦街》を「官の造るところにして、民力の致すところにあらず」（明治7年「政論の二」）と、これを「人民の権義」を無視したものだと非難した。このような街のデザインの造形から、「人民の権利」の思想を媒体とした国家のデザインの構築というダイナミズムのなかにこそ、透谷の違和感を解消するでたてがあるのでないか。

銀座の街並みに「詩想」を感じず、美麗な言葉で景観を形容できなかった透谷は、街の意匠を形造るもうひとつの力—民衆の精神の高揚—という側面に気づいていた。それは、政治と文学との間に身を置き、自らの身体をもって明治の近代を表現し続けた透谷だからにはかならない。透谷は現在も問いかけるだろう、《今の時代に詩歌なきや否や》と。さて、現代はいかに……。

きたはらやすくに●（日本近代文学研究）

私の好きな建築

兒 島 嶺

カーニバルが終わった。わたしは帰らなければならない。

南米、ボリビアのオルロで行われるカーニバルのハイライトは、「悪魔の踊り」。

知識人たちのグループは、カーニバルの死を惜しむ人たちに答えるかのように、カーニバルが終わってもアトラクションを行う。だが、精肉解体業者たちは、翌年の再会を約束しあい、わたしをあれほどにまで感動させた「悪魔」の仮面をしまいこんだ。

同じ「悪魔の踊り」なのに、わたしは精肉解体業者たちの踊る姿に、特別なものを感じる。知識人グループの踊りにも、鉄道職員グループのそれにも、さめている。知識人グループのアトラクションは美しい、と人は言う。美しさは、わたしを感動させない。では、わたしはなにに憑かれているのだろうか。居候をさせてくれた寛大な女友達が不機嫌になるほど、カーニバルが終わってからのわたしの素行はひどかったらしい。帰国日が近づくと、ますますエスカレートしていった。

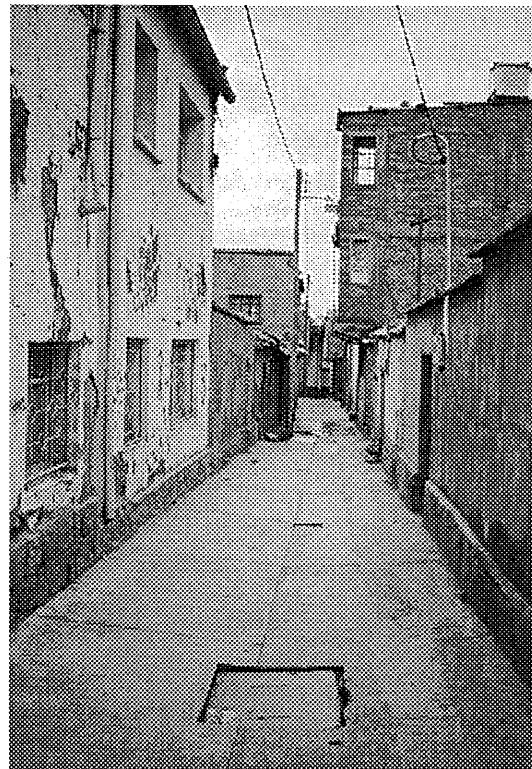
荒れていたのは、帰国日が近づいても、知識人と精肉解体業者の「悪魔の踊り」の違いを、うまく説明できないからだろうか。飲み友達は、そろって、知識人のグループを賛美する。カルロスだけは、孤軍奮闘するわたしにエールをおくるわけでも、かといって、知識人グループを誉めやかすわけでもなく、ただ、わたしたちの会話を静かに聞いていた。だから、「悪魔の踊り」やカーニバルに、興味がないのかと思っていた。

その日も朝まで酔っ払っていた。たまりかねた店の主人が、すでに常客となつたはずのわたしたちを追い出す。帰らなければならない。どこかへ。

標高3706メートル。街をとり囲む山々の狭間に太陽が差し込むと、それまでの凍るような冷気は跡形もなく蒸発する。すぐそこにある太陽が容赦なく肌を焦がす。

居場所を失い、あたりの急激な変化に、いらいらするわたしたち。

カルロスは、わたしに言った。君に秘密



を教えてあげよう。「悪魔の踊り」に関する謎が、解けるかもしれないよ。

嫉妬心からか心配からか、ついて来ようとする友人たちを制して、カルロスは、わたし一人を案内すると言い張った。

「悪魔の踊り」は、もともと鉱夫たちが踊っていたといわれている。鉱夫たちは、通常、カンパメント(campamento)と呼ばれる集合住宅地にかたまって住んでいた。だが、1985年の錫危機をきっかけとして、おおがかりな合理化が行われ、多くの鉱山は閉鎖された。集合住宅地の所有権も個人に移り、転職や転居によって家屋が売却され、もはやかつてのような画一された住宅ではなくなった。「悪魔の踊り」も、今では鉱夫たちによって紹介されることではなく、精肉解体業者に執り憑かれているわたしは、「悪魔の踊り」の秘密を探ろうとして迷路に迷い込んだ生け贅のようだった。

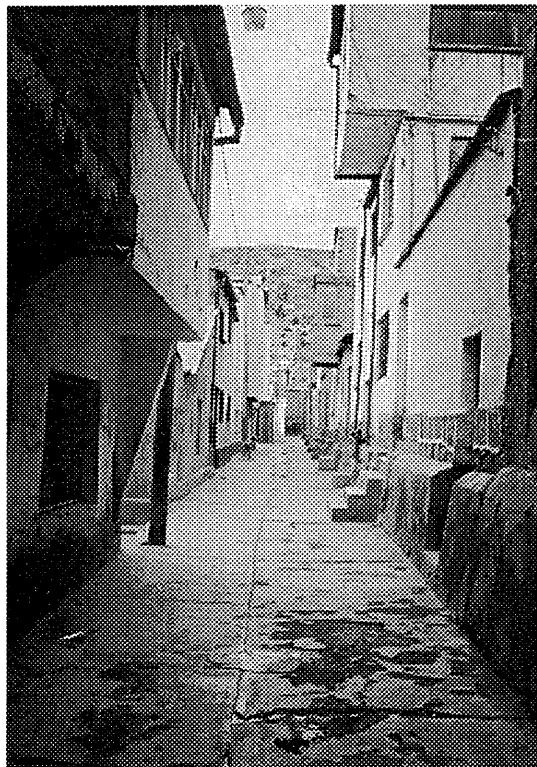
かつて鉱物産業によって栄えたオルロの中心は、市の西部にある。聖母が出現した奇跡をきっかけに建てられたといわれる教会や、行政などの省庁も集中したこの地区に、わたしは毎日のように足を踏みいれていた。そして、明け方六時ごろ、カルロスがわたしを案内した場所は、まさに、奇跡の教会のすぐわきなのだ。

ここが、かつて、鉱山労働者の集合住宅だったなんて、今じゃ、オルロの人でさえもわからないかもしれない。でも、よく見てごらん、はっきりわかるよ、とカルロスは言う。一件一件の家の間取りが、外からでも分かるだろう。いやに小さいとは思わないか。官製の集合住宅だから、普通の間取りより小さいんだ。そう言われて、注意して見れば、確かにそうだ。あくまでも、ボリビア基準であるが…。

そして、言った。「悪魔の踊り」は、この街の、この街路で生まれた、と。

オルロ市郊外や、地方の集合住宅地には行ったことがある。わたしには、わからない。街の中心の隠された、なぜ、ここなのか。なぜ、この街路が、「悪魔の踊り」なのか。

そんな状況を察してか、カルロスは突然身を翻し、小走りにわたしの前を駆けていった。朝七時の交替勤務に向かう鉱夫た



ちは、こうして出かけていったんだ、と言って。わたしは、はっとした。

道幅だ。道幅は、大男が両手を広げたら届くかもしれない。身長167センチのわたしが手を伸ばしても、両隣の壁に手はつかないが、道幅が、明らかに、違う。

知識人の「悪魔の踊り」は、美しいだろう。カメラワークを意識し、劇場や広場で踊る様子は。精肉解体業者の踊りは、街路の踊りだ。鉱夫のグループは解体した。鉱山労働者は、市外へと移動した。今、住んでいるのは、塵肺や落盤の危険とは無関係な生活をしている、幸運にも、市の中心地を譲り受けた人たち。

「悪魔の踊り」の踊り手たちも、もはや鉱山労働者ではない。だけど、身体はその尺度を忘れない。両手を広げれば届きそうな、オルロの狭い、昔ながらの街角で、踊っていた、鉱夫の身体感覚を、身体は、記憶している。

帰らなければならない。わたしは思った。

わたしの身体に「悪魔の踊り」は宿らない。知識人の身体に、わたしを涙させる「悪魔の踊り」が宿らないのと同様に。それは、確かなことかもしれない。しかし、かといって、わたしの身体は、知識人の身体のようにもならない。わたしは知った。わたしは、ともにいる、この身体に、なんらかの記憶を刻み込もう。どこにいようと、わたしはわたしの身体を失うことはないのだ。帰ろう。わたしの身体に刻み込まれた「悪魔の踊り」の記憶とともに。

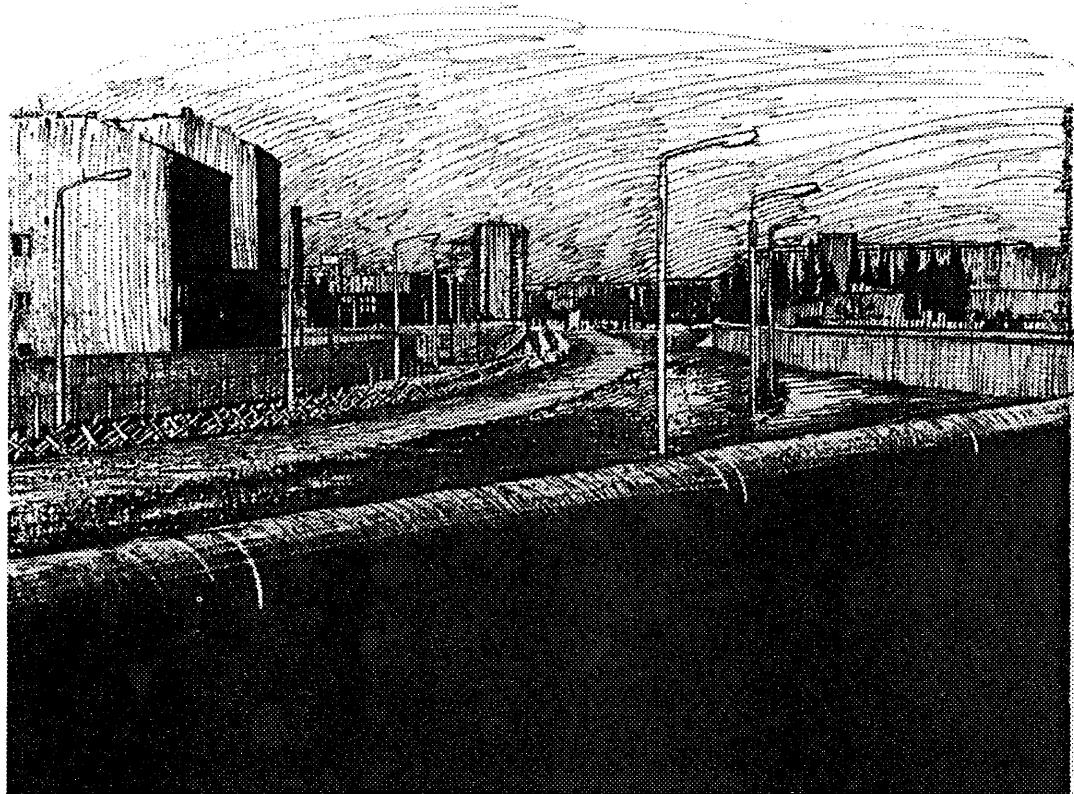
(こじまみね／社会人類学者)

ベルリンの壁

その壁は、もう長い間、人々の生活を分断し、愛を拒んできたのであった。あの時、壁を前にして感じた震えは一体なんだったのか、今となってはよくわからない。人間の心の闇が、そのまま形になってしまふことへの恐怖だったのか。

あの日の感動を、私は終生忘れる事はない。100年は崩壊することはないだろうといわれていたコンクリートの壁は、人々の歓喜の渦の中で、一夜のうちに瓦礫と化した。東も西もなく、人々は抱き合い、喜び合った。私は遠く離れた日本で、テレビの前で一人涙を流した。

後にどのような歴史的評価が下るかはわからない。いたるところに「非平和」は転がっている。しかし、人間に乗り越えられない困難などなく、憎しみなどなく、そして人間が享受できない歓喜などない—ベルリンの壁の崩壊は、そんな漠然としたイメージを与えてくれたのだった。



佐々伸子

◆ 私の思う 20世紀の建築 ~香港・九龍城砦~ ◆

私は”廃墟”と聞くと何故かこう引き込まれるような感覚に囚われてしまう質なのですが、ここ最近世間で話題の〇〇遺産などとはまた一線をかく思いで”廃墟”に対峙する方は私以外にも少なくないと思います。今回は『私が思う20世紀の建築』がテーマなので廃虚論を唄うのは別の機会にし、<九龍城砦>に絞って書き綴ろうと思います。

みなさんも記憶に新しいかと思いますが、通称<九龍城>は香港政府が中国に返還されるのを10年後に控えた1987年に香港の汚点の一掃を謀って取り壊し決定され、1993年に住民の強制退去が実行され取り壊されました。現在跡地には世界統一規格のような公園が、以前あったカスバの片すら匂わすことなく静に佇んでいます。

私がここを訪れたのは住民の強制退去が済んで取り壊しも始まり、もう場内への侵入？も不可能かと思っていた1994年の夏のことでした。せめて取り壊し状況でもいいからとの思いで、強制退去させられたであろう住民の目がまだ周囲に感じられる中、カメラ片手に期待に胸踊らしながら仮囲いのすき間から、もう半壊した<九龍城>を物色していました。少し落ち着きも戻り我に返った次の瞬間、工事車両用ゲートがオープンになっているのを発見！嘘丸だし状態で工事職人を装い堂々とゲームより侵入開始。難無く侵入クリア（後で注意されたのはもっともだが…）となり目前にある半分瓦れきと化した<九龍城>を前に、ただ興奮状態でシャッターを切っていました。

わずか2.8haの面積のなかに4～5万人が居住していたと言われるこの<九龍城>の秩序の片も見当たらないこの群造形は、空間の連続性や美しさなどといった現代建築に求められた要素は皆無に等しいのだが、何か強烈なエネルギーを発散し、半壊した状態ですら想像を超える域で私のことを突き刺しているようでした。

社会人として、設計者として、現代〔20世紀〕の秩序、規範、ルール、展望などといったものに知らずと縛られ、動かされていた自分を、建築を、今世紀を、あざ笑うかのように佇んでいた<九龍城>だった。



佐藤 基（連合設計社市谷建築事務所）

20世紀・私の好きな建築 シトー派修道院建築を訪ねて

鈴木 喜一

●ノアラックの秋

中部フランスの美しくも哀しい田園が連綿と続いていく。白い牛達、農家、納屋…、そして人の生と死のように、晩秋の喬木は壯厳な風景を見せて来たるべき冬を耐えようとしている。揺れて煙をはきながら、ローカル列車は自然の領土を突き抜ける。

サン・アマンドの駅に着いたのは、暗い空になってしまった午後4時頃だった。小さな街は、どこをどのように歩いても10分とかからないうちに田園と繁がれている。歩き疲れて身を投じた安宿の暗いバーは、長い夜をやり過ごそうとする土地の人達でにぎわっている。その中で私は、シュークルットやワインで口腹を満たしながら、ノアラック修道院に思いをふくらませていく。パリから二日がかりという、建築にむかう長い序曲である。

朝、目をさますとホテルの窓からは深い霧。寒い夜があけて、写真の撮れない空を悔やみながらも、リュックサックを整える。とにかく新しい朝が始まったのだ。気をとりなおしながら、ノアラック修道院までの4キロの道を歩き始める。濡れた野草、新鮮な空気、しめった白茶の野道の上に張りついた色濃い枯葉……、そうした秋の野の風景が私を包んでくれる。口ずさんでいくような気持のよい足取りとともに、次第に空も晴れあがっていった。

ノアラック修道院—この拉致し去る魅力は何だろうか。私は、牛や鳥たちの鳴き声ばかりの静寂な野に存在している修道院の前に立ちつくしながら、喜びをかみしめる。この建築にはそびえたつ双塔も、交差部の鐘楼も何もない。それは、まちの真中にあってそのままのまちの表情でもあるカテドラルとは相違して、むしろ遁世の深い静けさをもった、祈りの世界としてあらわれる。積み重ねられた小さな石の深い色彩、切妻に切り落された単純な屋根、厚い壁にあけられた小さな窓…。石造の農家をそのまま精神的に高めていったような素朴な形体は、どうすることもできない魅力をもって、立ちつくす私に波のように押しよせてくる。

教会内部の床に、少し下がるように足を踏み入れる。半円筒ヴォールトの石造天井がつくりだす単純な空間。そこには壁画や絵ガラスは存在しない。わずかにシンメトリーをはずしたレイノーの清新な透過ガラスは、天空の変わりゆく光の様を奥深く壁から伝え、そして外部の緑を淡く映している。私はゆっくりと歩きめぐりながら、珠玉のようなクロイスラー（回廊）に捉えられ、サン・ベルナールという12世紀の最も偉大な思想家の実現した空間に全身を沈めていった。

このノアラック修道院は、1977年ジャン・ピエール・レイノーによって修復されたシトー派建築である。レイノーは1939年生れのオブジェ作家で、現在パリで最も注目されているヌーボー・リアリズムの前衛作家の一人であり、タイルや植木鉢の作品でよく知られている。彼のイメージする造形は、俗なるものが消失して、メディテーション（瞑想）の場に

ふさわしい。その彼が、サン・ベルナールのシトー派建築を見事に再生した。私はこれ程までに精神のよみがえった修復を知らない。

●シトー派について

シトー派修道会は、1098年、当時のヨーロッパ修道会の中心であったベネディクト会内のクリュニー派が、ローマ法王、諸王、貴族達と結びつき、壯麗な教会の建築、巡礼の組織化、十字軍遠征の促進等に熱心であったのに対し、清貧を愛し、沈黙のうちに祈りと労働の生活を送ろうとブルゴーニュのシトーの地に創立された。彼らはベネディクト会の原初の精神にもどろうとし、その戒律を厳格に実施していった。中心的指導者であるクレルヴォーのサン・ベルナールにより全西ヨーロッパにひろめられ、12～13世紀に最盛期に達している。

彼らの生活は、「一枚のチュニック、一枚の頭布つき法衣。共同寝室における一枚のわら布団。鉄製の一個のキリスト十字架像。粗末な食事。鐘も絵画もステンドグラスも彫像もない簡単な教会。無品級修道士の援助をともなった肉体労働。清浄で純潔な精神生活。完全な共同生活と修道会内における地方分権化」（「西欧文化の条件」より）であったといわれる。また、クリュニー派は丘陵上に会堂を建てるのを好んだが、経済的自立を原則としていたシトー派は、農地開拓に適し、都市とも連絡のよい低地の森、川、泉の周辺に修道院を建設した。彼らはグランジェと呼ばれる農業経営上の施設をつくり、所領をグランジェ単位に配分し、そのまわりに耕地、牧草地、ブドウ園、森林、河川等がとりまくよう計画し、小麦畑をつくり、ブドウを栽培し、牧羊等を行った。これは西欧の近代的農場経営のモデルともなつたものである。

●攻めも守りもなく野に咲く花

ヴァナキュラーな建物の素朴さに、シトー派のこうした精神を結実させて、一つの建築として空間化したものが、このノアラック修道院であり、名高いフォントネー修道院であり、トロネの修道院であった。それらの空間には、石が石として、木が木として、ガラスがガラスとしてその生命と精神を失われずに存在している。材料が美しい、それはそんな感慨を抱かせる。そしてまた、現代建築が急速な勢いで失ってしまった本物の材料の豊かさを教えてくれる。

建築とは、人を驚かせたり、権威づけたり誇張したりするものであってほしくない。シトー派の建築には、神の家としての華麗な輝きはないが、無力にも等しいことを知った個としての謙虚な祈りの空間が息づいている。それは、きわめて自然で無欲な建築の成立の仕方である。旅で解き放された心に何の束縛もないように、シート派建築は、建築に何かを背負うことを切り捨てて生きてきた。それらの修道院は、山岳にでもなく、都市にでもなく、野に咲いている。

（すずき・きいち／鈴木喜一建築計画工房）

20世紀・私の好きな建築

——ブリュグマンの教会——

鈴木 久子

■意外性

国の重要文化財の貫前（ぬきさき）神社を訪れる機会があった。車を降りて目の前の石段－100段は優に超えると思われる一を昇って行く。空は高く青みを帯びて、夏の陽射しは容赦なく肌の水分を奪う。頂上の大鳥居に達したが正面に社殿の姿はない。ほどなく朱塗りの総門をくぐる。あろうことか、そこから先は、また延々と降る（くだる）のである。やっと昇ってきたのに呼吸が整う前にもう降る。神社へのアプローチが『下り参道』という非常に珍しい形式だったのである。この体験は得難い。一般的な『上り参道』の場合、敷地を昇りながら奥の院に辿りつく。貫前神社の場合は、まず昇ってあたかも劇場の天井桟敷から舞台をみおろし、俯瞰する視点に立つ。杉木立を通して見おろすこの社殿配置に姿なき設計者の存在を感じた。（この場合設計者といってふさわしいものか否か）。

*教訓1

『われわれの意識は普通でないもの、異なる事物、見慣れない風景を目の当たりにすると特別敏感に反応する。』（住宅特集 1993年4月号 建築天廻業より）

論旨が途方もなくそれてしまった。『20世紀・私の好きな建築』の方にもどらなければ……。

■A. アアルトの建築探訪行脚

今から13年前の夏の終わり、A氏、B氏、C氏、私の四人でフィンランドを旅したことがある。うんざりする程アアルトを見よう。それがこのツアーの目的だった。連れ合いの転勤で9ヶ月ヘルシンキに住んでいるSさんとも合流。Sさんは当時、木造の保育園を次々と手がけていて、その合間をぬってのヘルシンキ在住であった。

ヘルシンキの建築士会に何度も足を運び、Sさんは可能な限りアアルトの建物にアポイントメントをとってくれていた。ヘルシンキ周辺はもちろん、ヘルシンキから遠く離れて点在するアアルトの建物は、5人でパヂエロをレンタルし、虱潰し（しらみつぶし）に訪れた。

かねがね、樋口清先生より、フィンランドに行ったら、ぜひこのチャペルに行くようにと勧められていた教会の近くまで来た。いただいたplanの様子がとても良い。

A氏はすでにここを訪れていた。しかし、もう一度ぜひ行きたいという。トゥルク(Turku)の市営墓地の中にあるこの礼拝堂は、

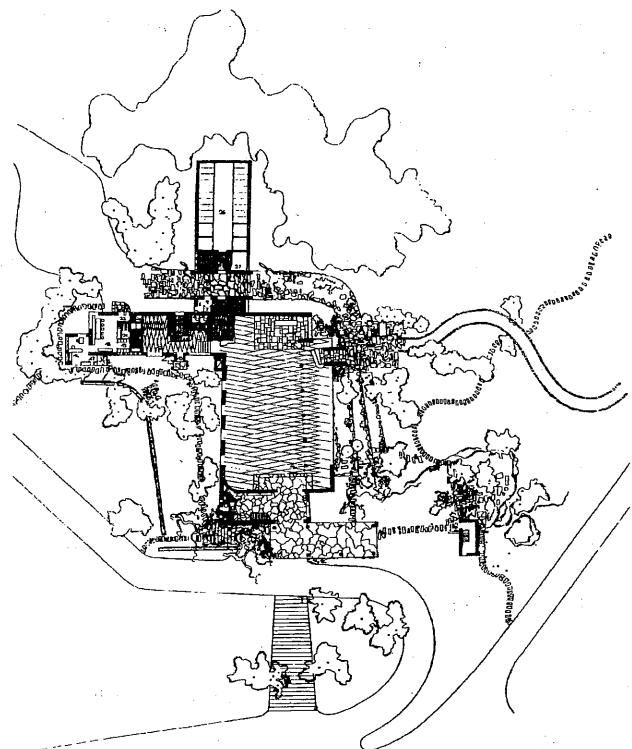
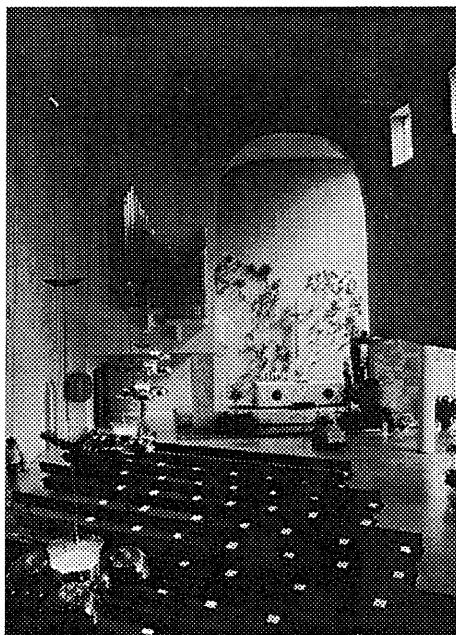
『RESURRECTION CHAPEL』 というらしい。

1939～41年、Erik Bryggman の設計である。

結構広い墓地の間を通り抜けて石段を昇っていく。白い箱のような建物がみえる。妻面の白い壁には細い十字架が金色にきらめいている。しかしながら、思ったよりそっけない印象である。本当にこれがそのチャペル？しかし、一歩足を踏み入れてその豊かな表情のある空間に佇むと声が出なかった。質素で硬い木の椅子にただ呆然と座り続けていた。

何のあてもなく12年何ヵ月かお世話になった設計事務所を辞した直後の事である。(今思うとなんと暢気な)

日本に帰ってきたSさんは、次の保育園の基本設計の段階で心臓の発作を起こして急逝した。一緒にブリュグマンの教会に行った一年後の事である。



私の好きな建築

高橋大助

なにものにも所有されたくないだけでなく、なにものも所有したくない。そのような嗜好が僕にはある。実際、そんなことは出来やしないのだが、前者は「意欲」として、後者は「モラル」として、僕のこころに形を与えていた。そのため、今回のようなテーマを提示されると、少し屈託した気持ちになる。例えば、日影さんの設計する住宅を、ぼくは“いいなあ”と思う。彼の手になる「家」は実に「家」らしい。最初に僕が取材した彼の仕事“s／y邸”は住居に関する僕の考えを一変する力があり、少なくとも僕にとっては、「住み継ぎ」という発想の原点だった。

しかし、僕自身がそういう「家らしい家」に落ち着きたいか、というとノーなのだ。

街にあっては、ゴチャゴチャ、ガヤガヤしたところで、ちょっと気の利いた、ちゃんとものを考えている人たちに会い、何かを紡ぎ出すために共同して、一日の終わりには、清潔で乾燥した、余計なものが何もない部屋（ホテルの一室ならなお良し）で一人、横になる。必要なものは全て、街に揃っていて、大した金もかけることなく、取り出すことが出来る。くたびれたら、それこそ、木や風の匂いのする場所で何日か、ゆっくりウロウロすればいい。……今や、時代遅れと誹りを受けそうなこんなヴィジョンに、高校生くらいの頃からずっと僕は取りつかれている。多分、中学から高校にかけて毎日のように見た風景が、こうした嗜好を僕に植えつけたのだろう。

今思えば、けっこう抜け道があり、また、それを案外上手に使っていたのだけれど、やはり、十代の僕にとって「学校」は充分に抑圧的であり、何とかして逃げ出したい場所だった。だから、学校から出て最初に目にする風景が特別なものに思えたのだろう。それは何とも据わりの悪い、違和感に満ちた、しかし、力強い風景だった。新大久保の街並みから立ち上がる高層ビル群。もちろん、実際にはその二つは離れて在るのだけれど、僕のいた場所からは、そのように見えたのだ。その錯覚をこころの内に留めながら、二つの場所を自分の身体で結びつけることを僕は楽しみとしていた。住宅街とラブ・ホテルとが奇妙に融合した新大久保を抜けると、ある面で確かに日本一だった歌舞伎町、次いで、新宿駅周辺の雑踏を過ぎ、さらに歩けば、高層ビル群。その中の一つを選んで展望室へと上る。この間、僕は蟻の目から鷹の目へと変わる。「場所」の力を借りながら、少なくとも二つの視点を獲得することで、自分がひとつでないことを実感しようとしていたのだ。

どうもこの視点の複数化ということが厄介で、未だにあるそれへの信奉が、僕の嗜好を形作っているのである。泰然と落ち着いて、しかも、視点を複数持つ、など言う芸当はとしても自分には出来やしないと思う気持ちからでもあるだろう。出来るだけ身軽でいなくて

は、と考えてしまう。だから、どのような場所に対しても〈散歩者〉として関わりたくなるのである。けして傍観者でいたいというのではない。〈散歩者〉はいつも場所の持つ力に影響を受け、場所は〈散歩者〉を規定しようとする。しかし、〈散歩者〉には目的がないため、場所は〈散歩者〉を縛り付けることは出来ない。場所に魅惑される〈散歩者〉は、しかし、場所にとっては他者であり続ける。誘惑しあう関係。お互い大いに気になってはいるのだ。いや、それは〈散歩者〉である僕の方だけで、場所の方では鼻も引っかけやしないのかもしれない。多分、きっと、そうに違いない。だから僕は、建築や街並みに対して語りかけようとするのだ。彼らを誘惑し、僕の愛するこころを受け入れてもらうために。

(たかはしだいすけ／住み継ぎネットワーク)

bolt。私の好きな建築？

高橋大助

普請中の建造物を取り囲むようにしてあるスチール製の板とパイプとで出来た「足場」、その一番上に僕は腰掛けている。だが、そこに建物はない。代わりに、「足場」が取り囲む直方体を、あたかも対角線のように斜めに横切る吊り橋がある。直方体の六分目ほどの高さに位置するその橋を僕は見下ろしている。夢の話、ではない。〈007-BOLT〉と題されたNUMBERING MACHINE・丹野賢一の公演のことだ。薄暗がりになれてくると、吊り橋に敷き詰められているものが見えてくる。bolt、だった。彼らは無難作に放り出されたようにして、そこにあった。わくわくする懐かしさ。臆病な僕には実際のところそんな経験はないのに、建築現場の大冒険を思い起こさせるのだ。

そして、彼、が登場する。いつもの彼。しかし、何處か近未来を思わせる革製らしいロング・コートに身を包んで、boltを踏みしめながら吊り橋を渡る彼には、今日は何となくバロック的な趣を感じる。だから、スチールのパイプを振り回す彼に僕はこんなあだ名をつけた。建築現場の荒ぶるフェアリー。

問題は彼の怒りの矛先。〈建築〉に破壊される自然の代弁者ではあるまい。〈建築〉という行為がその本質として持っている暴力性の化身なのか。いや、違う。彼の怒りに応えるようにしてざわめくものがある。boltの群。いつもなら、建造物を内側から行儀良く支えるboltたちが、今は、彼ら自身の歌を歌う。

boltの美しさ、多分それは機能とかたちとの幸せな一致から生まれる。文明の文脈の中で確かな役割を果たすこと、それが彼らの美を保証する。しかし、彼らのかたちは、時に機能を逸脱するのではないか。子どもの目はその逸脱を見抜き、彼らとともに歌うことが出来る。思えば、妖精を覗ることも、子どもだけに許された特権であるだろう。

だとしたら、建築現場のフェアリーは僕の中の子どもに語りかけるのか。しかし、彼の怒りの強さは、僕の過去への郷愁を断ち切ってしまう。結果、今の僕がboltと向き合うことを求められる。boltのかたちが持つ意味を僕はもう忘れることは出来ない。boltの機能を知らない子どもだから歌える歌とは、遠く離れてしまっている。だが、妖精に挑発された僕にはboltのかたちが見えてくる。まるで記号のように意味と直結していたboltがかたちとしてあることに改めて気づく。少なくとも僕にとって、boltのかたちはその機能と同じく重いことを妖精の怒りが思い出させるのである。ならば、かたちを規定しているように見えるboltの意味は、逆にかたちから見直すことが可能なのではないか。意味を知らない子どもには聞こえないboltの歌を僕は聞くことが出来るのかもしれない。そして、間違なくその歌は、日常を取り巻く「もの」との関係を僕に問い合わせる力を持つだろう。さらに、僕はこうも予感する。boltのその歌は〈建築〉の内側をのぞき込む手がかりともなるのではないか。〈建築〉という方法を手にした、持てる者の視点からではない、もう一つのディコンストラクション、という可能性をその歌が示唆するように思われるのだ。

そう考えると、我が妖精の怒りが分かってくる。彼は〈建築〉に怒るのではない。その

〈解体〉が中途半端で、彼が愉しむべき本質的に新しい〈場所〉が未だ生み出されないのでいることに腹を立てているのである。

(たかはしだいすけ／住み継ぎネットワーク)

丹野賢一 公演

11月に神戸、12月に東京で「008-MIRROR」という公演を予定しています。

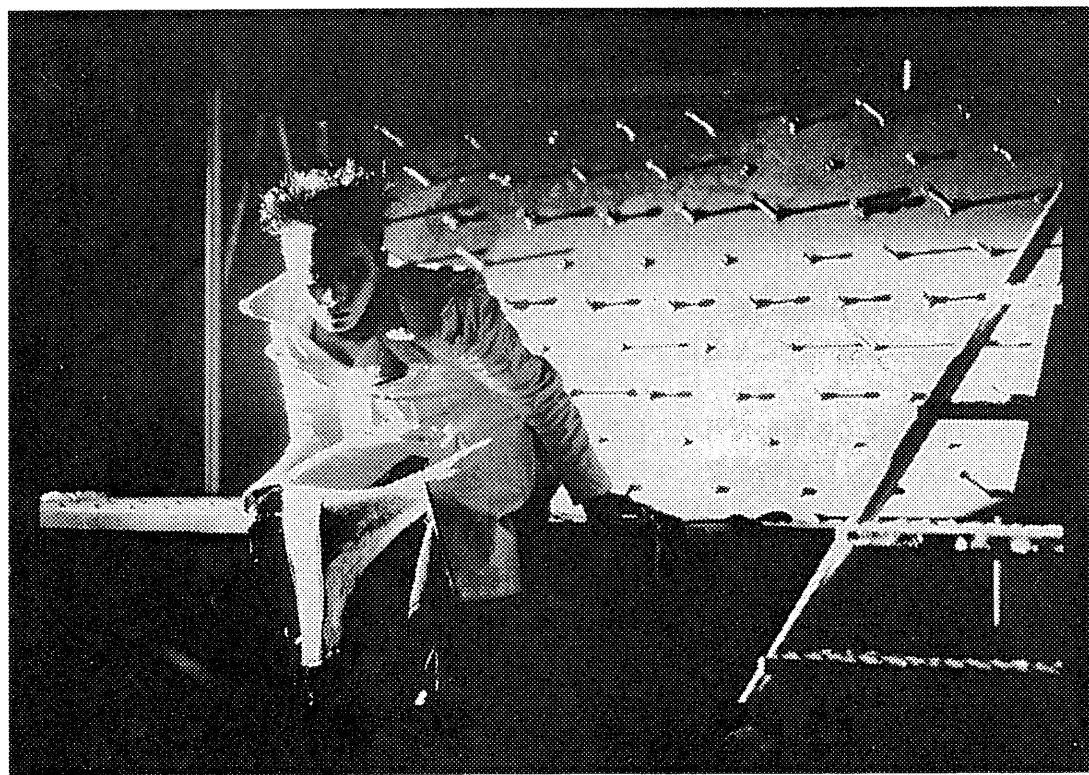
問い合わせ

NUMBERING MACHINE

TEL・FAX 03-5377-1983

E-MAIL numberin@eb.mun.or.jp

PHOTO／関 晓



『建築物』に対してのボクら

土 岐 安 麗 (とき あうら)

うるさい。すごくうるさい。ツツウなら気にもならない工事の音が、テスト中だとマジうるさい。ただでさえわからない問題が、もっとわからなくなる。うるさいったらない。

学校のトイレは嫌いです。それは、音が筒抜けだから。デパートのように音を流す機械もありません。誰がどうしたのか、すぐにわかってしまいます。仕方がないから、一度、水を流して、その音で隠します。みんなの顔を知っているから、余計にいやなんです。

授業中、となりのクラスで物音がしました。先生は止めたけど、誰も聞かなかった。みんなうしろを向いて、何があったか知ろうとしました。あとで話を聞いたら、態度を注意した先生に、Sがキレて机や壁をけったそうです。もっとやれ、って思った。

図書館の窓が壊されたそうです。それ以来、図書館には行ってないので知りませんが、けっこう大きいキズだったそうです。誰も言いにくる人がいなかつたので、先生は怒っています。しかるわけじゃないから、何か教えてほしいと言っていました。でも、もし僕が壊したんだったら、やっぱり言えないと思います。

何が面倒臭いって、雨の日の傘。何で傘立ては教室の前にあるんだろう。靴箱のある玄関に置けばいいのに。一年なんて四階まで運ぶから、かさばるし廊下は汚れるし。でも、先生方の傘は職員室の前に置かないんだ。靴箱の横に置く。ズルイ。

だんしがかべをけっていました。いたそうだから、やめてほしかったです。

トイレの前でたまんないでほしいな。アタシが行くと、大抵おしゃべりの為に女子が四、五人いる。わざわざ入口に立っちゃってさ。中に入りもしないで、鏡見てペチャクチャ。はっきり言ってジャマ。こっちは中に入りたいつーの。

屋上を開放してくれないだろうか。遊ぼうにも、プレハブ工事で校庭が使えないんじゃどうにもならない。高い柵がないから駄目なんだろうか。そんなの、落ちた奴の責任だろうに。俺はそんなに馬鹿じゃないから、学校のせいになんてしない。せめて、検討ぐらいはほしいものだ。

すごく暑いです。職員室にはクーラーがあつて、「いいな」と思います。音楽室にもあります。夏休み中にも使われる職員室はともかく、何で音楽室まで冷房付きなんでしょう。テストの日なんて地獄でした。三十度を超す日も、自然の風しかありません。クーラーをつけてほしいです。

保健室は、原則としてスリッパ着用だ。しかし、三年になるとほとんど守らない。特にワル系の男子。人が雑巾がけした後を、平気な顔で土足歩行。・・「ムカつく」って言葉は、こうゆう時に使うんだよ。てめえらで掃除しやがれ。

今日「建築物について」何か書こうと思った。でも、私には特に建物への興味がない。あるのは、日常生活で考える建築物への不満かなあ、不満と言うか、愚痴？別に人間関係じゃなくても、私達の話題には上がっているんだ。後は、『学校』という場所も建築物だと信じるだけだからさ。

(とき あうら／中学3年生)

木造雑感

木住研・桧山 文江

—プロローグ—

僕と彼女は引越しした。

古い家を購入してリフォームしたのだ。

あまり家に興味がなかった僕だが、いざ……となると不思議に、大工だったじいさんの血がすこしうずいたようだ。

僕なりにこだわりの住まい造りとなった。

豪邸とは言いがたいが、ちょっと素敵な家である。

でもこの新居、なんだかすこし懐かしい匂いがするんだ。

—春—

今日は花曇。

こんな日は景色がちょっと白っぽくていつもより空気が美味しいそうである。

木々の緑もだいぶ濃くなってきたようだ。

「ねえ、こっちも手伝ってよ」

彼女の声。そう、今日は引越しなのだ。

彼女は今朝からの僕ののんびりモードにご機嫌斜めらしい。

それもそのはず、ここ数日、引越しの準備と仕事に追われていた僕はそろそろ電池がきれそうである。

おかげで彼女のいろいろも悪化している。

それから、荷をほどくこと数時間。

まさに、険悪な空気とはこのことだろうか。

その空気に耐え兼ねたのか、彼女は話しかけてきた。

「この家新築の匂いしないね。ほら、独特のあるじゃない？」

すこしやさしい声の彼女に僕は今朝からの自分の行動にちょっと反省。

「うん。仕上げが木とかだからじゃない??」

「ふーん」

「ほら、設計やさんも言ってなかつた?

木は空気を調和してくれるとかって……ね。」

「……」

「じゃあ、私達の空気も調和してくれるかしら……」

……ちょっと反応に困るぼくだった。



一夏一

むしむしする季節。

毎年この時期、僕は苦手なこの季節をどう乗り越えるかと悩んでいる。

彼女は広縁で寝転がっていた。

実に気持ちよさそうだ。

「ねえ、この板の隙間狭くなったような気がしない？」

彼女は広縁の板をみながらいった。

「あ、設計やさん言ってたよ。季節によって隙間の幅かわるって‥」

「木が空気中の湿度吸ってくれるんだって。だから膨らんで狭くなったんじゃ ない？」

説明しながら僕も寝転がった。

「じゃ、冬になったら広くなる？」

「うん。きっと。木が縮むよ。」

「ふーーーん。」

それからも彼女はしばらくじっとなにか考えたように隙間を見ていた。

「ねえ、」

「ん？」

「そのおなかも今梅雨だから膨らんできたの？」

彼女のにっこりした顔はちょっと意地悪な顔になっていた。

—秋—

朝夕がちょっと肌寒い今日この頃。

僕の一番好きな季節である。

夏が苦手な僕にとって一年のうちで一番元気になれる季節かもしれない。

食事の時の話題である。

「ねね。やっぱりさ、本物の木の床っていいね」

「どうしたの？とつぜん」

今日の彼女はやけに元気である。

久しぶりの友人と再会が元気の素になっているらしい。

「今日ね、k子の家に遊びにいってきたの。家建てたんだって」

「へー」

「でね、帰ってきて思ったの。うちの床って……」

「なに？」

「やわらかいっていうか、やさしいっていうか…あたたかいっていうか… うーーん」

なにやらフローリングと木の床の違いを肌で感じとったことの感想を伝えたいみたいだが、いまいち彼女の表現がまだ足りないらしい。笑。

「私、あらためて感心しちゃった。

うーーん。そうだなあ…そう、うおのめにやさしい床？」

「……へー。」

時々、わけのわからない表現をする発想豊かな彼女にも僕は感心する。



—冬—

ニュースではこここの所の寒波で今夜あたりは雪がふるとの予報がでている。
雪の大好きな彼女はちょっとうれしそうである。
それを見て僕も子供のころにわくわくした気持ちを少しだけ思い出した。

ついているＴＶの音があまり耳に入っていない僕に気がついたのか・・・
彼女はチャンネルを変えた。

環境問題の特集だった。

そう、ここ数年メディアではよく取り上げられる話題である。

「そうそう、課長の子供ひどいアトピーなんだって。

家を建てるのに、材料の選定でなやんでるみたい。相談されたんだよね」

「そう。かわいそうね。」

「最近多いよなあ。そういう話し聞くの。」

「うん」

ＴＶの中の映像も、今や他人事ではなさそうである。

最近の子供はアトピーじゃない子のほうが少ないとも聞いている。

「この家なら子供も大丈夫だと思うんだけどな・・・」

僕がつぶやく。

「じゃああ・・・この子は大丈夫ね。」

「えっ？！」

彼女は僕にやさしく微笑んだ。

この夜、今年初めての雪が舞い降りた。

—エピローグ—

そうなんだ。

懐かしかったのは不思議なことではない。

僕達がいつも触れて、感じていたもの。

私の好きな建築

松井 郁夫

元来、建築を目指してこの世界に入ったわけではない私は、生まれつきへそ曲がりな性格も手伝って、改めて好きな建築といわれても困ってしまうので、今回は町を歩いていて見つけた、ちょっと面白い、工作物といつていいのか建築といって言いのかわからない、屋根をご紹介します。

それは、代々木駅の改札口にかかる屋根です。(まだあるのかなあ)
みなさん、よくご存知の予備校がたくさんひしめく側ではなくて、反対側のさびしい出入り口に、その屋根はかかるます。なんとトンネルをくぐった先です。

ごらんのように小さな木造の屋根です。なんだか線路の壁に寄り添うように、出入り口の階段を囲う庇みたいなものですが、なんともいえぬ雰囲気があります。一体いつ頃のものなのでしょうか。昭和の初めでしょうか。

この屋根を見たときは感動しました。いっぺんに好きになりました。それは、なぜなのでしょうか。自分でも説明できないのですが、とにかくうれしくなってこのスケッチを描きました。

まだあるかもしれません。もしかしたらないかもしれません。どうぞ代々木の駅を降りて確かめてみてください。忘れ物を見つけた気分ですよ。

